

OBARA

小原遺跡Ⅲ

— 緊急発掘調査報告書 —

1996.3

長野県松本市教育委員会

OBARA

小原遺跡 III

— 緊急発掘調査報告書 —

1996.3

長野県松本市教育委員会



小原道跡16区全景（北から）



小原道跡17区全景（北から）



小原遺跡第97号住居址（西から）



小原遺跡出土緑釉陶器・青磁・白磁

序

松本市南部に位置する芳川地区では、多くの埋蔵文化財が残されています。小原遺跡もその一つとして知られていました。このたびその一帯に土地区画整理事業がおよぶことになり、文化財の保護を図るために松本市が芳川村井地区土地区画整理組合から委託を受け、松本市教育委員会が小原遺跡の第3次調査として緊急発掘調査を実施したものです。

発掘調査は市教育委員会の委託を受けた（財）松本市教育文化振興財団によって組織された調査団により、平成6年6月から平成7年4月にかけて行われました。作業は梅雨、夏の猛暑から冬の厳寒期におよびましたが、参加者の皆様のご尽力により無事終了することができました。その結果、奈良・平安時代の竪穴住居址52棟のほか、掘立柱建物址、中世の遺構などを発見し、また同時代の貴重な遺物も多数得ることができました。これらは今後地域の歴史解明に大変役立つ資料になることと思います。

しかしながら開発事業に先立って行われる発掘調査には、記録保存という遺跡の破壊を前提とする側面があることも事実であります。私たちの生活が豊かになるための開発とそれによって失われる歴史遺産という矛盾のなかで、文化財保護に携わるものの苦悩は絶えません。本書を通して貴重な文化財の保護とその施策へのご理解を深めていただければ、この上なく幸いに存じます。

最後になりましたが、過酷な状況のなか発掘調査にご協力いただいた参加者の皆様、また調査の実施に際して、多大なご理解とご協力をいただいた芳川村井土地区画整理組合、芳川土地改良区の方々、地元関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成8年3月

松本市教育委員会 教育長 守屋立秋

例 言

1. 本書は、平成6年6月10日から8月25日、および同年11月7日～12月12日にわたり実施された松本市芳川小屋および村井町に所在する小原遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 本調査は平成6年度芳川村井十地区画整理事業に伴う緊急発掘調査であり、芳川村井十地区画整理組合より松本市が委託を受け、松本市から再委託を受けた(財)松本市教育文化振興財団・考古博物館が実施、本書の作成も行った。なお業務委託および再委託にかかる事務処理については松本市教育委員会が行った。
3. 本書の執筆は次の通りである。

I: 事務局、II-1: 太田守夫、その他の執筆および編集作業を竹原 学(考古博物館)が行った。

4. 本書作成にあたっての作業分担は以下の通りである。

遺物洗浄: 内澤紀代子、竹平悦子、洞沢文江

遺物保存処理・復原: 五十嵐周子、内田和子、大角けさ子、村松恵美子

遺物実測: 大城よしの、竹原久子、松尾明恵、MIN AUNG THWE、村田昇司、望月 映、吉沢克彦

遺構図整理: 石合英子

トレース: 内田和子、開嶋八重子、竹原久子、松尾明恵、村田昇司、村松恵美子、望月 映

組 版: 荒木 龍、竹原久子、竹原 学、長睦和正、松尾明恵、吉沢克彦

写真撮影: 竹原 学、村田昇司(遺構)、竹原 学、宮嶋洋一(遺物)

5. 本書で使用した遺構名の省略語は次の通りである。

竪穴住居址→住、掘立柱建物址→建、柱穴列→柱、土坑→土、特殊遺構→特、ピット→P、溝状遺構→溝

6. 遺構図中の土層名は記号化している。各記号の説明は以下の通りである。

表記法 上色(混入物・量) 混入物量 a 少量 b 中量 c 多量

土 色

1 褐色	7 茶褐色	13 赤灰色	19 黒色
2 暗褐色	8 灰褐色	14 黄灰色	20 焼土
3 黒褐色	9 橙褐色	15 青灰色	21 砂
4 明褐色	10 灰色	16 黄色	22 砂礫
5 赤褐色	11 暗灰色	17 暗黄褐色	23 緑灰色
6 黄褐色	12 黒灰色	18 暗茶褐色	

混入物

A 小礫	H 黄色土粒	O 茶褐色土塊	V 灰色土塊
B 礫	I 黄褐色土粒	P 砂粒	W 赤褐色土粒
C 焼土粒	J 橙褐色土粒	Q 黒色土粒	X 赤褐色土塊
D 焼土塊	K 茶褐色土粒	R 黒色土塊	Y 鉄分
E 炭化材	L 黄色土塊	S 暗褐色土粒	
F 炭化物塊	M 黄褐色土塊	T 暗褐色土塊	
G 炭化材	N 橙褐色土塊	U 灰色土粒	

7. 図中に使用したスクリーントーン表現内容は以下の通りである。

遺構図: 網目(粗)→焼土 網目(細)→柱痕 かすれた密な斜線→粘土 砂目→炭片の散布範囲

遺物図: 網目(粗)→黒色処理 網目(細)→漆の付着 かすれた密な斜線→鍍金の付着 砂目→タールの

付着 横位のまばらな網目：朱墨の付着

8. 土器については観察表を省略したので、時期決定上の根拠となる調整技法などのうち必要なものについては図中、あるいは図の番号に添えてメモを付した。以下に一例を示す。

回転ヘラ削り —— —— —— 線で表し、稜線、ロクロ目と区別した。

底部切り離し 須恵器杯A（無台）はヘラ切り痕の確認されるもののみ底部に「ヘラ」を記した。記載のないものは回転糸切りか、あるいは不明のものである。

須恵器杯B（有台）、灰釉陶器碗・皿および緑釉陶器碗・皿は回転糸切り痕の確認されるもののみ底部に「糸」を記した（静止糸切りは認められなかった）。表示のないものは回転ヘラ削りが底面まで及んでいるものか、あるいは不明のものである（須恵器以外の一部にナデ・ミガキで消されるものも含む）。

土器・陶磁器の種別 土師器・土師質土器は断面白抜き、須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・青磁など陶磁器は断面塗りつぶしとし、緑釉・磁器については遺物番号の下に種別を併記した。また土師器のうち黒色土器については先に示したように網目トーンで表現している。

そのほか、必要な事項については本文中で触れた。

9. 本文中で用いている奈良・平安時代の時期区分や土器の分類・用語は（財）長野県埋蔵文化財センターによる中央自動車道長野線関係調査遺跡の成果に基づいている。それらも含め、総体に遺構・遺物に係る評価については以下の文献を参考としている。

（財）長野県埋蔵文化財センター 1990 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4 松本市内その1』総論編

（財）長野県埋蔵文化財センター 1989 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書3 塩尻市内その2』吉田川西遺跡

10. 本調査で得られた出土遺物および調査の記録類は松本市教育委員会が保管・管理し、松本市立考古博物館（〒390 長野県松本市中山3738-1 TEL 0263-86-4710 FAX 0263-86-9189）に収蔵されている。

目 次

巻頭図版

序

例 言

日 次

I 調査の経緯

1. 調査経過 1
2. 調査体制 1

II 遺跡の環境

1. 遺跡の地形と地質 3
2. 小原遺跡における過去の調査 5

III 調査結果

1. 調査概要 6
2. 遺 構
- 1 奈良・平安時代の遺構
- | | |
|--------------------------|-------------------|
| (1) 竪穴住居址・竪穴状遺構 12 | (5) 土 坑 15 |
| (2) 掘立柱建物址 14 | (6) ビット 15 |
| (3) 特殊遺構 14 | (7) 溝状遺構 15 |
| (4) 焼土面 14 | |
- 2 中世の遺構
- | | |
|--------------------------|-------------------|
| (1) 竪穴住居址・竪穴状遺構 15 | (4) 土 坑 16 |
| (2) 掘立柱建物址 16 | (5) ビット 17 |
| (3) 柱穴列 16 | (6) 溝状遺構 17 |
- 3 遺 物
- 1 縄紋・弥生時代の遺物 50
- 2 奈良・平安時代の遺物
- | | |
|---------------------|------------------|
| (1) 土器・陶磁器 50 | (4) 鉄 器 52 |
| (2) 文字関係資料 51 | (5) 石 器 52 |
| (3) 土製品 52 | |
- 3 中世の遺物
- | | |
|---------------------|------------------|
| (1) 土器・陶磁器 52 | (2) 鉄 器 52 |
|---------------------|------------------|

IV まとめ 68

図 版

I 調査の経緯

1. 調査経過

小原遺跡は松本市芳川村井町、および芳川小屋に所在する、古代・中世の集落遺跡である。平成6年、松本市大字芳川村井町に土地区画整理事業が計画され、当該地域が小原遺跡に含まれることが判明した。そこで村井土地区画整理組合、松本市都市整備課、長野県教育委員会文化課、松本市教育委員会の4者が遺跡の保護について協議を行った結果、遺跡の破壊止むなきとの結論に至り、事前に緊急発掘調査を実施、記録保存を図ることとなった。村井土地区画整理組合より委託を受けた松本市は、(財)松本市教育文化振興財団に本調査を委託し、財団では考古博物館が現地の調査、遺物整理、報告書作成にあたることとなった。またこの間の調査届け出、委託・再委託にかかる事務処理については松本市教育委員会が行った。

2. 調査体制

調査団長 守屋立秋(松本市教育長)

調査担当者 竹原 学、村田昇司

調査員 太田守夫、竹原久子、松尾明恵、宮嶋洋一、望月 映

協力者

赤羽包子、浅井信興、浅輪敬二、飯田三男、石合英子、石井脩二、五十嵐周子、市場茂男、牛越美知子、牛島みち子、内澤紀代子、内田和子、大城よしの、大角けさ子、大谷成嘉、大月みや子、人月八十喜、開嶋八重子、上條道代、河上純一、神田栄次、北澤達二、倉科祥恵、小島茂富、近藤高史、近藤忠美、斎藤政雄、坂口ふみ代、鷺見昇司、竹平悦子、田多井 亘、鶴川 登、寺島貞友、長澤多門、中村恵子、中村安雄、林 和子、林 武佐、羽山佳乃、平出貴史、深井美登利、福沢幸一、福嶋紀子、藤井源吾、藤井マツエ、藤本利子、布山 洋、洞沢文江、増澤 治、丸山久司、三沢元太郎、道浦久美子、三代澤二三恵、MIN AUNG THWE、村松恵美子、百瀬^{△△}二三子、百瀬^{△△}二三子、百瀬義友、矢崎寛子、横山 清、横山真理、吉澤克彦、吉田 勝

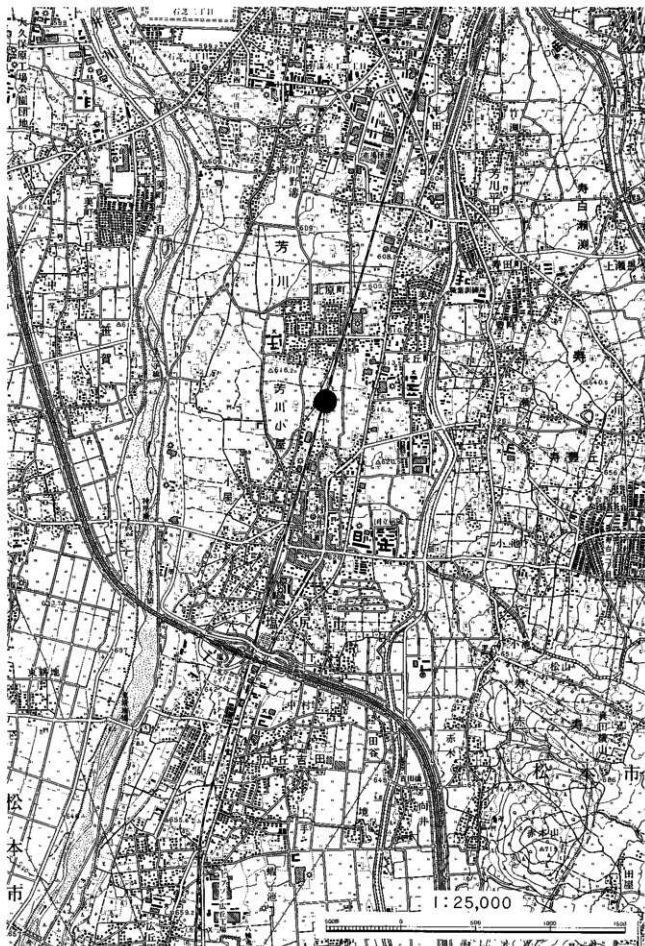
事務局

市教育委員会 岩瀨世紀(文化課長)、木下雅文(課長補佐)、窪田雅之(主任)

(財)松本市教育文化振興財団

事務局：大池 光(事務局長)、牟禮 弘(局次長～H7.3)、太田陽啓(局次長 H7.4～)、上條恒嗣(次長補佐～H6.9)、櫻井荘作(次長補佐 H7.4～)

考古博物館：熊谷康治(館長)、松澤憲一(主査)、古幡昌史(主任)、久保田 剛(主事～H7.3)、遠藤 守(主事)、秋山桂子(～H8.1)



第1図 調査地の位置

II 遺跡の環境

1. 遺跡の地形と地質

1 位置と地形

本調査地は松本市芳川村井町の北部小原地籍に位置する。JR 篠ノ井線と県道環状高家線の袴線橋の東部分を挟んだ、南北の二つの地区から成る。袴線橋の東側部分は、第一次発掘小原遺跡の3区に当たるので、三発掘調査地が南北に並んだことになる。しかし3区は既に高い袴線橋と側道に覆われていて、3区の地形の見通しは出来ない。調査地は古くは桑畑・麦畑で、戦後開田された場所である。

地形上は奈良井川（西へ約1000m）洪積扇状地末端と田川（東へ約750m）の沖積扇状堆積の接点に当たる。地形面や堆積層の状況、地形の形成については、第一次発掘小原遺跡の報告書（松本市文化財調査報告No.86）に詳しく述べたので、ここでは省略するが、今回の発掘地のほとんどは田川の沖積層の堆積で、奈良井川の堆積は、両地区の西側の一部にすぎない。

2 堆積層と流れ

奈良井川系洪積層と田川系の洪積層は次のような状態から区別できる。即ち奈良井川系は、黄褐色ローム質土、礫混り黄褐色ローム質土と多数の大礫から成る。礫の大きさは、大・中礫の円礫で、礫種は硬砂岩が多数で、砂岩・チャートにわずかの花こう岩・粘板岩（頁岩）・けい岩・輝緑凝灰岩が混じる。礫層と土層は介在することが多く、その堆積の方向はN50°~60°Eである。田川系の沖積層は、田川水系に共通する鉄分による汚染・沈着が目立つ。礫の種類は、砂岩・緑色凝灰岩・石英閃緑岩・安山岩・砂岩や緑色凝灰岩のホルンフェルスなどで、細・中礫の円礫が主で大礫はない。介在する土層も鉄分の汚染を受け、砂・礫を混在する褐色~黒褐色土である。また土層内に三層の礫層（深さ30cm・60cm・1m）がみられ、流れやはん濫の頻度・時間差が読める。堆積の方向はN10°~70°Eで、蛇行の傾向を示している。

16区は、東および西側の礫層と中央の発掘地の大部分を占める褐色土層からなっている。西側の礫層は奈良井川系の堆積層に沿い、深さ50~60cm内を幅1~1.5m、延長30m、北西（30°）・北・北西（10°）を蛇行している。田川系の鉄分で汚染された細礫を主とする流れを示している。東側の礫層は褐色土層中深さ50~60cmのところを断続的にみられるもので、鉄分に汚染された礫まじり土、細・中礫から成っている。N30°Wの方向を示すが一連のものか不明である。礫はいずれも細礫を主とし、砂岩・チャート・粘板岩は、円礫、石英閃緑岩・安山岩は亜円礫、凝灰質岩は亜円礫の河床礫からなり、赤褐色~黒褐色に汚染されている。層厚は50cm内外である。なおこの層の上に汚染のない新しい河床礫がみられるが、奈良井川・田川の双方の礫層に重なっているため、後の水田せぎと考えられる。

中央部の褐色土層は輝石にみられるように1mを超える厚いもので、上層は褐色土、下層に行くにつれ黒味を増し粘上質となる。上記の礫層や礫混り土は、この褐色土層中に取り込まれたもので、西に隣接する奈良井川系の黄褐色ローム質土と違い、田川系の特徴を示している。住居址はこの土層中（深さ60cm）に営まれている。

次に17区は3区を挟んで16区の真南に当たる。16区と同様に西端は奈良井川系の堆積層に接しているが、大部分の上層や礫に田川系の流れの影響が認められる。16区ほど明らかな堆積はみられないが、北端の中央から南東隅へ延長40m、幅1m前後、厚さ20cm前後の礫層が断片的につながっている。方向はN10°W、N30°W、N10°Wと蛇行して3区へ向かっている。含まれる礫は砂岩・砂岩のホルンフェルス・閃緑岩・安

山岩・ひん岩・けい岩の中礫を主とする細・中礫層である。いずれも鉄分により赤褐色・黒褐色に汚染されている。

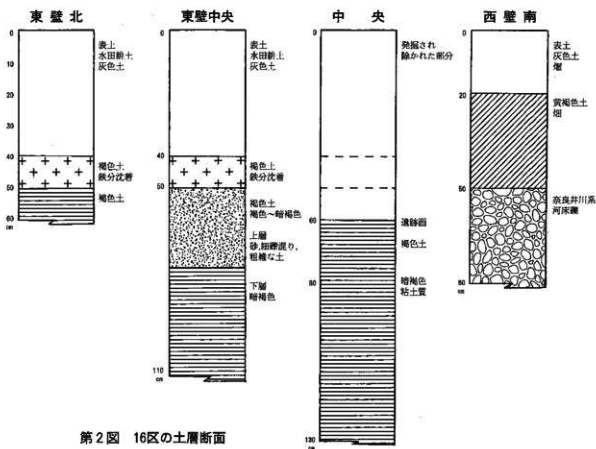
この礫層の線が、奈良井川系と田川系の接触帯と考えられ、西側には奈良井川系の大・中礫（堆積方向N60°~70°E）や黄褐色ローム質土がみられる。接触帯の東側は微地形的な凹地を示し、土層は北壁でみると、田川系の鉄分で汚染された粗雑な土壌である。なお、この接触帯は3区の22住の付近を通り、16地区の南側の礫層周辺につながるものと考えられる。また、東側の凹地形は、奈良井川系堆積層の傾斜面と田川系の浸食・被覆によって出来た微地形的な凹地が埋積されていたものと思われる。接触の仕方には、奈良井川系の堆積層を鉄分で汚染するだけのものと、堆積層を被覆したものがある。3区は前者で、17区は後者である。

すなわち、17区では、奈良井川系の黄褐色ローム質土や礫の堆積層（N60~70°E）の低所になった面を被覆し汚染した状態が、接触帯の西側でみられる。また、3区では、22住から30住の方向へ、奈良井川系の礫岩帯が褐色～赤・黒褐色に汚染されていたのが印象的である。

3 地形の形成と遺跡

調査地の基本的土層は上から、1：表土（水田耕土）灰色、厚さ30cm、薄い鉄分の層を挟む。2：褐～赤褐色土（田川系）黒褐色土（田川系）いずれも鉄分汚染、粗雑な土、黒褐色土（腐植土）。3：黄褐色ローム質土（奈良井川系）。4：基底礫層（奈良井川系）の順になっている。したがって、これらの上層と介在する礫層は、それぞれの堆積の順、時間差を示しているものと思われる。遺跡面（深さ60cm）に現れた礫層や礫、同時異相の土層は、遺構によって切られているので、遺構成立（平安時代、中世）以前に安定していたものと考えられる。発掘地の東方では後の堆積や流れの跡が見付かっている。

17区の南端には東西長さ10m、幅1m、汚染された細礫・粗砂を中心に、中・大礫を混えたせぎ様の堆積がみられるが、接触帯との高低差から、後世のせぎと思われる。



第2図 16区の土層断面

2. 小原遺跡における過去の調査

小原遺跡はこれまでに2度の発掘調査が実施されており、今回は第3次の調査となった。本節では第1・2次調査についてその概要を記しておく。詳細については報告書が刊行されているので参照されたい(松本市文化財調査報告No86・107)。また第3図に今次調査とあわせ、調査位置・遺構の大半を示し、本頁に検出遺構・遺物について一覽表を掲載した。

第1次調査は主要地方道環状高家線建設に先立ち、平成元年5月～7月に実施された。位置的には遺跡の中央部を東西に貫く、710mの範囲である。この部分では奈良時代末～平安時代前期の竪穴住居址・掘立柱建物址、中世の竪穴住居址・土坑・墓址などが検出され、中世に至っては微高地の西側一帯にも集落が広がることが判明している。遺物も古代においては多数の墨書土器・円面硯、中世では刀、刀装具などが出土し、一帯が古代・中世の重要な地域であったことが明らかとなった。

第2次調査は小屋地区の土地区画整理事業に先立ち、平成4年4月～11月に調査が実施された。調査の対象は遺跡中央を南北に貫くJR篠ノ井線の西側、第1次調査の1・2区を挟んだ南北約230mの地域である。調査の結果、古代の集落は南北に長く広がることが判明し、おおむね集落の北端部が把握され、南は更に現集落に続くことが予想された。また平安時代後半期においても南半部を中心に集落が展開、奈良時代末～中世に至るまで疎密を伴いながらも集落が継続することが明らかとなった。

小原遺跡の集落の動きについては奈良時代末～平安時代前期においては住居密度が高く、墨書土器や帯金具など特殊遺物の集中する北半部に中心があり、若干空白期をおいたのち、平安時代後半期には南半部に中心が移動、中世鎌倉時代においては西～南方の広範囲にわたって居住活動が行われることが読み取られた。また古代においては各時期を通じて甲斐型土器の流入が目立って多く、周辺地域との活発な交流や、「財富加」の墨書土器や鉄鏃・鉄鈴に当時の人々の思想や信仰の一端が垣間みられた。さらに3次調査で発見された14世紀前半代と目される2701枚からなる埋納銭の存在も注目された。

奈良・平安時代においてはこの地域は筑摩郡良田郷に比定されており、つい最近まで実態のまったく分からなかった小原遺跡はこれら2回の調査から吉田川西遺跡、吉田向井遺跡などと並んで郷内屈指の集落であったことが明らかとなったのである。

第1表 第1・2次調査遺構・遺物一覽

調査年	調査次	調査原因	調査地区	遺 構	遺 物
1989	第1次	主要地方道環状高家線建設	1～13区	竪穴住居址 29 (奈良・平安23、中世6) 竪穴状遺構 4 (中世) 掘立柱建物址 3 (奈良・平安2、中世1) 柱穴列 3 (中世) 土 坑 54 ピット 130 溝状遺構 5	奈良・平安時代 土器：土師器・須恵器・灰粘陶器 鉄器：刀了・鏃・鏃・鏃・釘 他 銅製品：帯金具 石器：砥石 中世 土器・陶磁器：土師質・山茶碗・青磁 他 鉄器：短刀・刀子 他 銅製品：刀装具・銭 他
1992	第2次	小屋地区土地区画整理事業	14・15区	竪穴住居址 62 (奈良・平安) 竪穴状遺構 2 (中世) 掘立柱建物址 6 (奈良・平安4、中世2) 柱穴列 4 (奈良・平安1、中世3) 土 坑 69 ピット 165 溝状遺構 3 (奈良・平安1、中世2) 埋納銭 1 (中世)	奈良・平安時代 土器：土師器・須恵器・灰粘陶器・緑粘陶器 鉄器：刀子・鏃・鏃・鏃・釘 他 銅製品：帯金具 石器：砥石 中世 土器・陶磁器：青磁 他 鉄器：釘 他 銅製品：銭

Ⅲ 調査結果

1. 調査概要

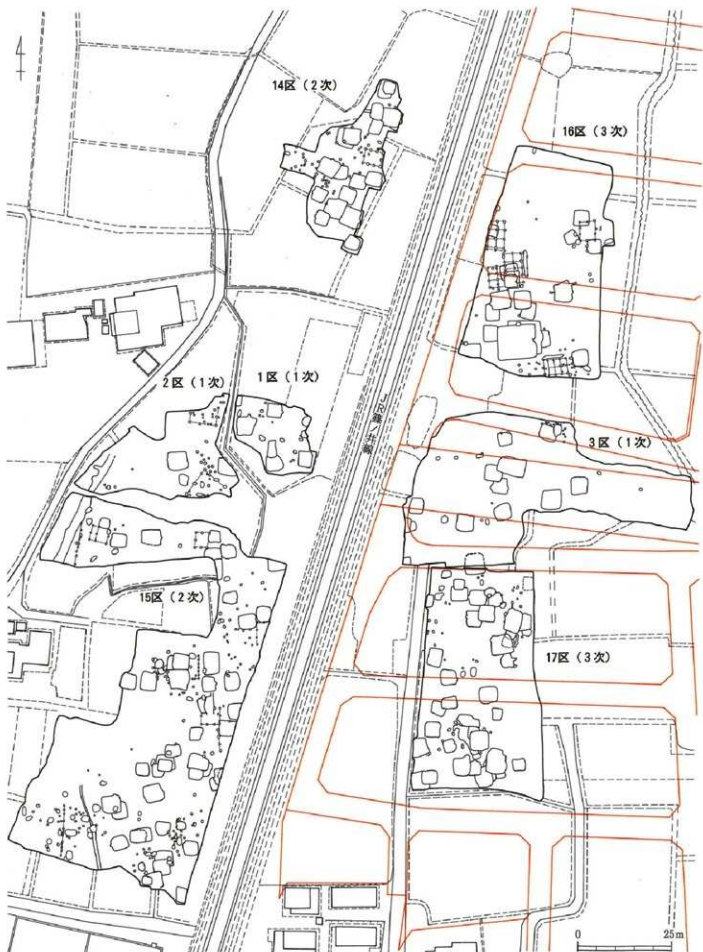
今回の第3次調査はJR篠ノ井線の東側、主要地方道環状高家線の南北一帯が対象となった。開発地域のうち、遺跡の占める部分はこれまでの調査からみて約36,000㎡が該当し、調査時点での地目はほぼ全域が水田となっていた。調査範囲の選定にあたっては遺跡が広範囲に及んでいる反面、工事施工時期、耕作物、JR線の近接地などの都合もあり、全面的な調査はあきらめざるをえない状況にあった。従って調査地点はこれらの支障がなく、かつ遺構の集中し遺跡の広がりを捉えるのに適当な2地点を選定し、調査時期も2時期に分け、高家線道路より北側の地点を夏期に、南側を秋期に調査することとした。

調査地区は高家線の北側を16区（小原ⅢA次）、南側を17区（小原ⅢB次）とした。これは第1次調査からの連番で、これまでローマ数字で表記してきたものだが、表現が煩雑になるため本調査からはアラビア数字に改めることとした。なお調査遺構の番号についても1次からの継続で連番とし、竪穴住居址についてはこれまでの調査で生じた欠番も再使用している（32・54住が該当）。

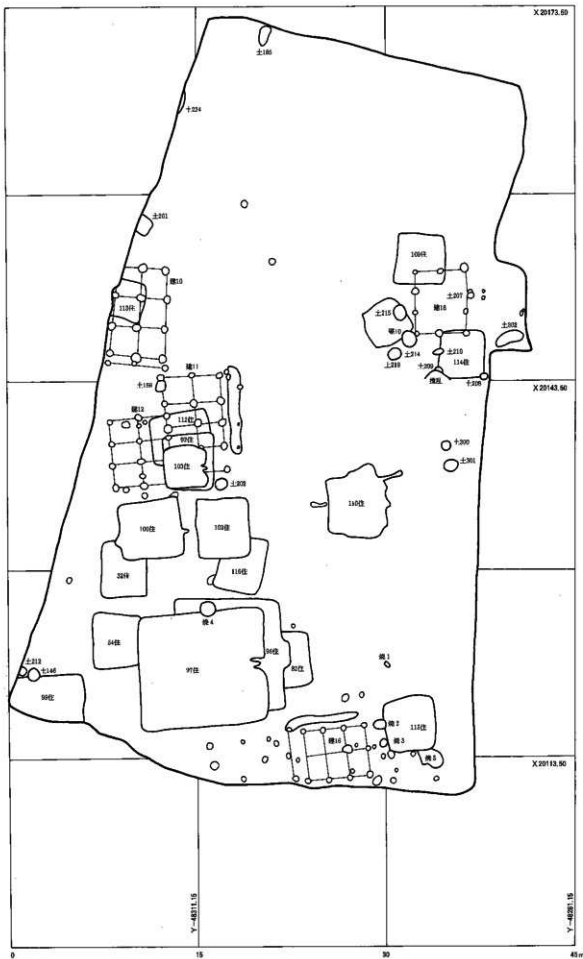
遺跡における測定の基準についてはJR線沿いにある区画整理用の測量杭（既知点）から座標軸（真北方向）を導き、16区、17区別々に3mの方眼区画を設定した。方眼区画の座標値は第4・6図に示している。なお、第1・2次調査では座標値を導かず、磁北方向を基準に方眼を設定しているため、今次調査地区との厳密な位置関係は示しえない。

今回の調査ではこれまでの調査と同様、古代～中世の遺構・遺物が多数検出され、これまでの調査とあわせて小原集落の構造をより鮮明にしえる点で成果があったものと考えられる。特に奈良時代前半期の住居址、奈良時代末の大型竪穴住居址と掘立柱建物址群、平安時代後半期の住居址群と緑釉陶器の多出、中世の良好な屋敷地の検出などが特筆されよう。これらの詳細とまとめについては次節以降に譲るが、ここでは調査面積、検出遺構、出土遺物についての概要を以て、列記しておく。

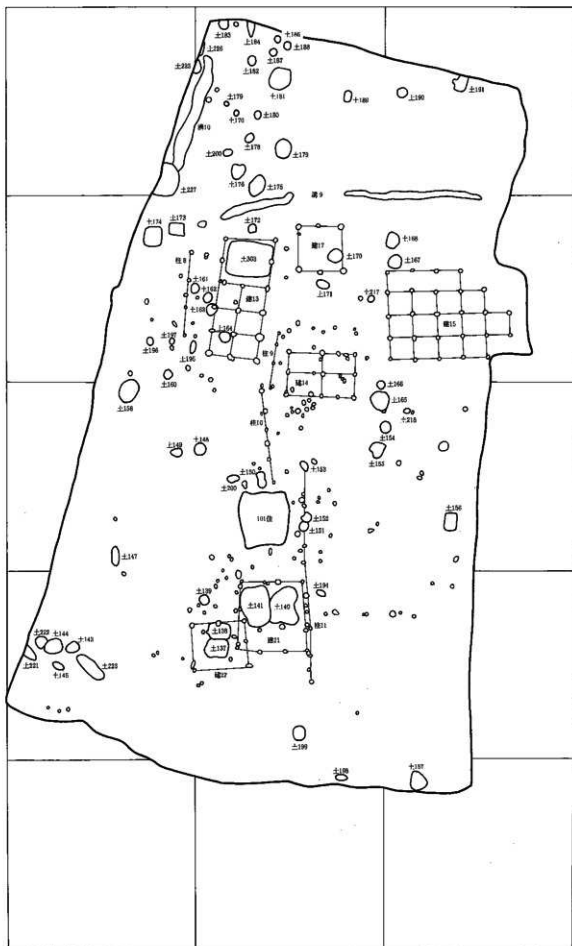
調査面積	16区	1822㎡	
	17区	1778㎡	
	合計	3600㎡	
検出遺構	竪穴住居址	52棟	（奈良～平安51・中世1）
	竪穴状遺構	5棟	（奈良～平安3・中世2）
	掘立柱建物址	13棟	（奈良～平安5・中世8）
	柱穴列	4列	（中世）
	焼土面	5基	（奈良～平安）
	特殊遺構	2基	（奈良～平安）
	土坑（含火葬墓）	146基	（奈良～平安53・中世93）
	ピット	143基	（奈良～平安25・中世118）
	溝状遺構	3条	（奈良～平安1・中世2）
	出土遺物	縄紋～弥生時代	石器（石鏃・打製石斧・磨製石包丁等）
奈良・平安時代		土器・陶磁器（土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・白磁）	
		石器（砥石・浮子等）・鉄器（刀子・鏃・鋤先・紡錘車・釘他）	
		土製品（鍾・紡錘車）・その他（墨書土器・硯・鉄滓・埴場等）	
中世	土器・陶磁器（土師質土器・須恵質土器・青磁）		
	鉄器（釘等）		



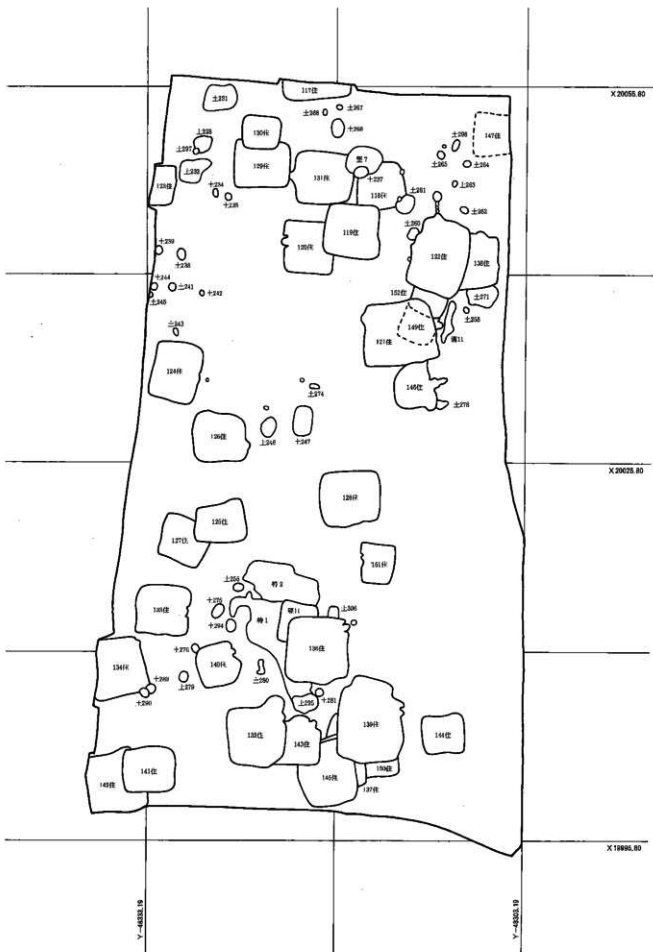
第3図 1～3次調査の範囲



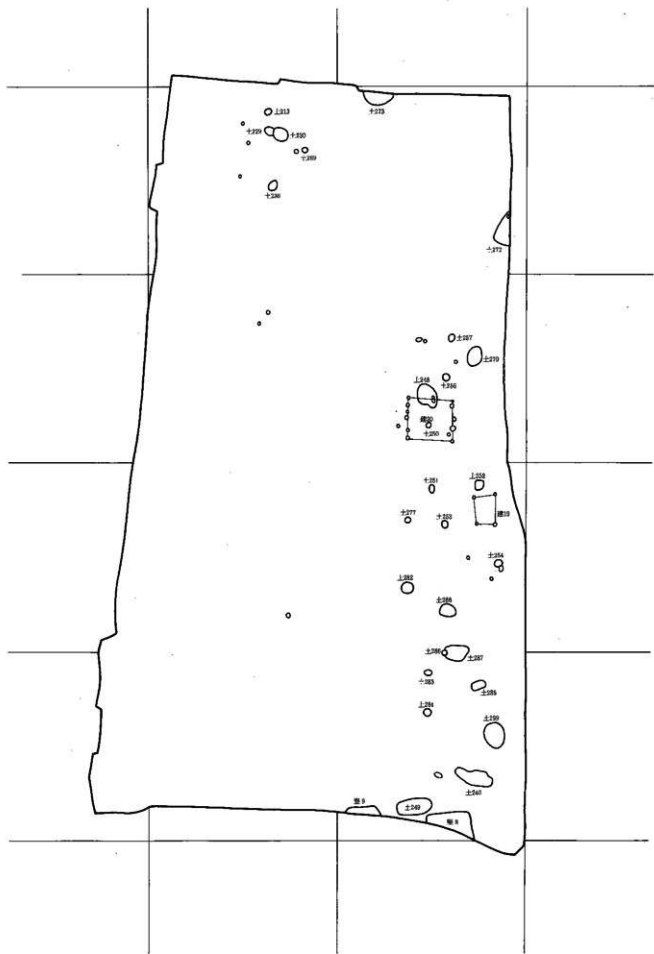
第4図 16区古代の遺構



第5図 16区中世の遺構



第6図 17区古代の遺構



第7図 17区中世の遺構

2. 遺構

1 奈良・平安時代の遺構

(1) 竪穴住居址・竪穴状遺構 (第2表、第8～24図)

竪穴住居址・竪穴状遺構は16区18棟、17区36棟の合計54棟が検出された。個々の遺構の詳細については第2表に譲り、ここでは時期ごとの概略を述べておきたい。なお各住居址の時期比定については出土器の様相、他遺構との重複関係などを参考にした。総じて出土土器の良好なものについては時期の絞り込みが可能だが、そうでないものについては幅をもたざるをえなかった。また調査時点で規模の小さいものを竪穴状遺構と命名したが、むしろ土坑とすべき竪7を除けば住居址との区分があいまいで、遺構の特徴からは区別できないため、ここでは一括して扱う。

各住居址の時期的分布は2期～15期にわたり、時期によっては粗密がある。形態、規模、構造にも時期ごとに多様性がうかがえる。また、住居の廃絶時における礎の投入やカマドの破壊、カマド周辺での祭祀をうかがわせるものもあり、これらをふまえながら時期ごとに概観する。

2～3期 54・109・110・113・114・118・146・149・152住、堅10がこの時期の確実な例である。ほかに82・92・112・151住もこの段階と推定される。各住居址とも方形基調だが、南北に長軸をとる長方形プランも存在する。146住のみやや特異な形態をなし、半円形に近いプランを呈している。各住居址の規模は概して小形で、長辺4～5m・床面積13～16㎡のものが主体である。なかでも151住は非常に小さく、逆に大型住居址と呼べるものはない。カマドは3棟で確認され、146・149住が東壁中央、110住が当初東壁、後西壁に造り替えている。146・149住は壁外に燃焼部が張り出す形態で、3棟とも一部礎を芯材にして粘土袖を構築する。煙道は火床面より一段高く、奥壁中央から水平にトンネル状に長くのび、先端部にピットを伴うのが特徴である。146住では住居の規模に比べてカマドが大きく、燃焼室から煙道に至るまで異常なまでに被熱しており、周囲の地山が広範囲に焼けている。住居址床面上にはカマドからかき出された炭・灰が堆積しており、かなり頻繁に使用された状況を呈している。一方92・109・112・114・118住、あるいは堅10などカマドをもたない住居址もあり、むしろ主体を占めているのも特徴的である。

そのほか、いずれの住居址でも柱穴は存在しないか、明瞭でない。屋内の諸施設としては110・146・149住でカマド脇に貯蔵スペースと考えられる浅いピットが見受けられ、また110住には掘りこみが深いためか、出入り口に関わるものとして南壁に階段状のテラスが設けられている。

この時期の住居址は54住を除いて覆土中に、廃絶時に投げ込まれたような礎はほとんどみられない。また遺物もカマド周辺などにわずかな完形品類が残されるほかは覆土中からの破片の川上もごく微量である。カマドは天井部や袖が失われるが、故意によるものか判断はつかない。

4～6期 32・96・97・120・122・127・131・133・138・147住が本時期に帰属し、99・116住も可能性が高い。最も検出数の多い段階である。住居址の平面形態は長方形が多く、隅丸の形態も存在する。長軸の方向は南北6棟に対し東西が4棟である。規模は前段階と同様、長辺4～5m・床面積12～15㎡のものが主体だが、極端に小形のものはみられない。逆に96・97住のような長辺9～10m・床面積70㎡以上の超大型住居址が存在し、この時期としては最大規模である。なお97住は続く7期に比定されている下神遺跡SB97(泉埋文センター調査分)より一回り小さいが、形態・規模・柱配置・カマドのあり方などの点で酷似し、ほぼ相似形をなしている。

カマドはほとんどが東壁中央で、ほかに西壁中央が1棟、北壁西寄りも1棟ある。構造は96・122・138住が粘土袖・張り出し形態のほかはいずれも石組カマドである。煙出しは短くはっきりしないが、122住は前

段階のものと同様、トンネル状の長い煙道と煙出しピットを伴う。超人型住居址の96・97住はカマドの規模も特大である。なお32・116住はカマドのないタイプである。

柱構造は超大型の97住が4本主柱の礎石建ちで、壁沿いに支柱の礎石が巡る。標準的な規模の住居址では柱穴はみられない。その他の施設としては貯蔵穴様の浅いピットや122住のような深い掘り方のものには階段状の入り口施設がみられる。

住居の廃絶時の行為としては127・133住で礫の投げ込みが観察されるほか、カマドの破壊ははっきりしないが133住では天井部が失われ、内外に土師器甕の大形破片や完形に近い食器類が残されていた。96住ではカマドから北東隅にかけての床上、ピット内に完形の須恵器杯、杯蓋、土師器杯などが残され、意図的に置き去りにされたものと受け取られた。

7・8期 100・102・103・115・119・123・124・126住が該当する。平面形は長方形ないし方形で、隅丸の形態もみられる。長軸の方向は東西3棟、南北2棟である。規模は長辺4～5m・床面積14～17㎡のものが主体である。前段階のような超大型のものはいずれもない。

カマドは102・115住で存在しないほかはすべて東カマドである。壁中央やや南寄りに設けられるのが通例である。構造も張り出しタイプはなくすべて通常の石組カマドで、煙道は短い。103住では燃焼部から煙道にかかる部分の天井石3個がそのまま残存していた。

いずれの住居址とも明確に主柱穴を有するものはない。100住は西壁南寄りに鍛冶炉かと思われる炉址状の張り出しが取り付け、鉄滓2点をはじめ刀子などの鉄器の保有量が多い。工房的な建物であろうか。同様に100住に隣り合い、カマドのない102住は床面の中央に浅い土坑状のピットが、115住では石列状の施設と被熱した床、遺構周囲の焼土面など、火を伴う鍛冶作業などの工房的な性格を帯びたものと推察される。

住居の廃絶時の行為は各住居でカマドの意図的な損壊が見受けられる。たいていは天井を破壊し、内部に土師器甕の破片が集積される。またカマド内外には食器類も残される。カマドの石材は住居外に持ち出されるか、礫の投げ込みが行われる住居ではその礫中に散在している。

9・10期 140・143住が該当する。137・150住もこの段階か住居址数は極端に少ない。平面形態は隅丸方形または隅丸長方形である。規模は長辺3.5～5.5mのものが確認されている。カマドは東壁北隅、北壁東隅、北西隅など、隅に寄る石組カマドである。143住では住居の軸に対してカマドの軸が斜交している。

柱穴のはっきりしたものはなく、床面施設はカマド脇の貯蔵スペースが大きく壁外に張り出すものが143住でみられる。住居廃絶時にはカマドの天井部を破壊し、焚口～カマド脇に食器類を多く残している。食器類はたいてい上向きか下向きに置かれ、143住では灰軸皿で蓋をした灰軸碗が焚口に置かれていた。カマド廃絶にかかる祭儀をとり行ったものであろうか。

11・12期 132・134・139住があり、129・130住、壁11もこの段階かと思われる。平面形は隅丸方形ないし隅丸長方形で、132・134住が長辺4.7m前後・床面積16～19㎡、139住が一回り大きく長辺6.8m・床面積27㎡である。

カマドはすべて石組で、西壁北隅に構築される。129・130住はカマドを設けないようである。カマドの脇には貯蔵穴があり、132住ではそれが壁外に張り出している。前段階の143住と同形態をなし、建替えと考えられる。139住は貯蔵穴とは別に北壁の大半が張り出し、この部分の床面はスロープをなしている。主柱穴は不揃いだが139住が4本柱と考えられる。

住居廃絶時にはカマド天井部の破壊と、カマド周辺での祭祀が想定され、付近の床面上から完形の食器類が上向きないし下向きに残される場合が多い。また礫の投げ込みも一般的にみられる。

13～15期 121・128・136・141・142住がこの時期にあたり、117・125住も該当しよう。平面形は隅丸長方形が多く、規模は長辺4.2～4.8m・床面積10～16㎡のもの（125・136・141住）と、長辺5.4～5.9m・床面

積22~25㎡のもの(121・128住)とがある。全貌の明らかでない117・142住は後者と推定される。

カマドは石組で、位置は東壁北隅がほとんどで、125住のみ北壁西隅にある。141住は南西隅のピットがあるいはカマドかもしれない。主柱穴は121・136・142住でみられ、いずれも4本柱である。142住では柱穴間の床面がタタキ床、北と南の残り部分が軟弱な床となり、住居内での空間使用法を示唆している。

前段階と同様、カマドの天井部は壊されるようで、塵の投げ込みも顕著である。カマド周辺の床上には食器類が完形で残され、廃絶時の祭祀行為を物語っている。

(2) 掘立柱建物址 (第3表、第24~26図)

古代の掘立柱建物址は5棟が検出された。帰属時期は出土物が少ないため確定し難いが、切合関係なども考慮するとおおむね5~7期頃に構築されたものと推定される。平面形態はいずれも長方形で、3間×2間の柱配置である。また側柱式の建18を除きすべて総柱式である。そのうち建10~12の3棟、あるいは建11・12の2棟は連続的に建て替えられたものと推定される。

建物の規模は桁行が494cm(柱間165cm)~572cm(同191cm)、梁間386cm(柱間193cm)~462cm(同231cm)、面積19~29㎡である。建10~12は総柱式建物としては大形の部類、建18は側柱式としては平均的かやや小ぶりなものといえる。建物の付属施設としては、総柱式で高床建物と捉えられる建10・11の南壁、建16の西壁外に柱列が壁と平行に存在し、櫓、あるいは出入りにかかる施設かと受け取られた。建12の南側、100住との間にも2基のピットがあり、同様な施設かもしれない。ほかに建11の東壁、建16の北壁に沿って雨落状の溝が設けられている。溝中心から柱穴中心までの距離は建11で1.2m内外、建16で80cm内外を測る。

建物址からの出土遺物は建11・16の側溝覆土から少量の土器器・須恵器片が出土したほか、建11の柱穴内から土師が1点出土している。しかし、柱穴内への土器などの意図的な埋納はみられない。

(3) 特殊遺構 (第31図)

17区の南部で検出された性格不明の遺構である。検出時の状況から特1→特2の変遷が捉えられ、さらに両址は壘10・136住に東部を切られている。

特1は東半部を失うが、主要部はおおむね東西5m×南北4mの長方形をなすと考えられる。底面は平坦で、中央部では住居址のようにタタキ床をなす。西北隅には西行してL字状の溝状部分が、さらに南側にも南東方向に走る溝状部分が取り付け、その先端は上坑295に接続する。溝は南部ほど深みを増し、上295内には礫が多い。遺物は皆無に等しく、わずかな土師器片と主要部中央の底面に残された土製紡錘車1点が得られたのみである。

特2は特1と同様、東西約4.5mの路長方形で床状の平坦な底面をなす主要部を有し、その北壁中央から派生、西走後屈曲して東に向きを変え、主要部西北隅に再び接続する幅0.8m程の溝状部分を伴う。この溝状部の覆土上層は2.5mの間が焼上りし、土師器片が伴っていた。土師器器の特徴などからみておおむね2~3期頃の遺構と考えられるが、遺構の性格を決定する遺物は何もない。

(4) 焼土面 (第30図)

16区の東南部、97住から115住にかけての一带で5基検出された。検出面の地山が著しく被熱しているもので、本来は焼土面4・5のように土坑状の掘り方を伴っていたものと考えられる。これらのうち焼土面1・4は特に被熱の度合いが著しく、その表面は硬化して亀裂が生じている。また焼土面1は中央部に小ピットがあり、この内部はあまり熱を受けていない。この状況は100住の西壁に設けられた、鍛冶炉と仮定した焼土遺構と同じであり、関連する性格のものかもしれない。ただし100住のそれも含め、焼土面からは直接鉄

に結びつく資料は得られていない。もう1点焼上面2・3・5は115住とも密接に関連する可能性がある。115住の覆土中に存在した石列は焼上面2・3の付属施設とも考えられるし、住居址も石列下の床面に被熱硬化範囲がみられる。また出土遺物に鉄滓が4点あり、先の100住の焼上面とあわせ、間接的に鉄との関連を考えておきたい。なお焼土4周辺には焼土粒、炭粒が広範囲に散在しており、これらの遺構と関連するものと捉えられた。同様に炭・焼土が広範囲に散在する箇所として109住から114住周辺があり、焼土の伴った土坑がいくつか検出されている。

時期的には焼上面1～5からの直接の遺物出土はないものの、96・97住との重複関係、および115住との関連からみて7～8期頃の遺構と考えたい。

(5) 土坑 (第31・32図)

総数53基が検出され、うち36基を図化提示した。土坑とピットとの区別は単に大きさによる基準だけであり、土坑とした中にはピットと区別し難いものも多数含まれている。また土坑の分布は主に建18周辺、147住周辺、123住周辺、特1・2周辺で集中がみられ、それ以外の地域での検出数は少ない。

個々の土坑について詳述する余裕がないので形態的な特徴からいくつかをまとめると、まず住居址や竪穴状遺構の特徴に近似し、規模が小さいものとして $1224 \cdot 231 \cdot 232$ をあげることができる。これらはいずれも方形基調となるもので、垂直な壁と平坦な底面をなしている。そして完形、あるいはそれに近い遺物、特に土器が底面に遺存している特徴を有する。土224は全形をつかめないが、あるいは住居址の可能性もある。10期の土231では多量の礫の投げ込みがうかがえる。土232では東北隅に突出部があり、底面が若干被熱、須恵器鉄鉢型土器が置かれていた。

次に長方形ないし長楕円形を呈し、土坑墓の可能性があるので、土247・285・306の3基が存在する。いずれも覆土中に少量の礫があり、底面は平坦である。ただし墓を決定づける確証はない。土201・302はロムマウンドと考えられるもので、二日月形を呈し、底面が片側に深く傾斜するものである。

残りの大半は円形ないし楕円形基調で、平坦な底面をなすものである。遺物も含まないものが多い。土209・210・214・215・219は覆土に焼土粒や炭粒を含む点で周囲の109・114住や壁10と共通し、焼上面の項で触れたが、この周辺に焼土粒・炭粒が広範囲に散布している事実とあわせ、これらの遺構に関連を感じさせる。土255・275・294は特1・2と覆土が近似し、やはり関連性があるものとみなされる。

(6) ピット (第4・6図)

検出数は25基と少ない。いずれも円形で浅い。建16付近に集中傾向があり、柱痕を伴うものが多い。おそらく建16とともに建物群を構成していたものの一部かと考えられるが、この付近は攪乱による削平が著しく、配列などの確認ができなかった。また単独の柱穴も存在すると考えられる。

(7) 溝状遺構 (第34図)

149住の東壁に沿って検出された。幅36～66cm・長さ368cm・深さ10～16cmを測り、丸くくぼむ底面をなす。その位置関係、方向、覆土の状況、遺物からみて149住に伴う付属施設と考えられ、2期に帰属しよう。

2 中世の遺構

(1) 竪穴住居址・竪穴状遺構 (第23・24図)

16区で検出された1棟を屋内施設のあり方からみて住居址として扱った。101住がそれで、東西の壁が胴張り形態をなす長方形のプラン、4基の主柱穴、上間状のタキキ床、長方形を呈する囲炉裏状の火処を備え

ている。遺物は極めて少ないが、火処より出土した土師質土器の皿からみて13世紀代を中心とした時期の遺構と推察され、後述する掘立柱建物址などとともに屋敷地を構成していたものであろう。

壱8・9は調査区外に大半がかかるため、屋内施設・性格など、不明な点が多い。小礫の多い覆土、底面をなし、あるいは十坑や溝状遺構の一部の可能性もある。

(2) 掘立柱建物址 (第3表、第27～29図)

合計8棟が検出された。このうち柱構造の明確に定まったものは建13・14・15・17の4棟で、残りは平面形・柱間などが不定の歪んだ形態のものである。

前者はいずれも16区にあり、屋敷地の中心的な建物として機能していたと考えられる。このうち建15は北および西側に庇の付く大型建物址で、居住遺構にふさわしい規模のものである。総柱である点から高床構造と考えられる。建13は長屋風の建物で、北端部の2間×2間の空間に長方形の土坑が付属する。あるいはこの部分の平面形が歪んでいることから、3間×2間の総柱建物に土坑を伴う2間四方の側柱建物に接続しているとも受け取られる。土坑は底面に小さな破砕礫を敷いており、鉄分の沈着が著しい。総柱部分と土坑の伴う部分で機能が異なり、前者は高床構造となっていたのであろう。建14・17は小規模な建物で、先述の2棟とともに屋敷地を構成したものと考えられよう。なおいずれの建物址も柱穴は円形の小ピットで、掘り方は比較的深いものの柱痕から想定される柱が細いのが特徴である。

後者の、不定形の建物址としては建19～22がある。これらは屋根の伴う建物を想定しがちであるが、必ずしも言い切れないであろう。仮に屋根が存在したとしても前者の建物とは異なり、簡単な小屋がけ程度のものであった可能性が高い。建21・22は土坑(土137・138・140・141)を内包するものである。土坑は両趾とも一度の掘り直しを行っている。特徴としては建13のもの(土303)に近い形態、断面形をなし、覆土下層に木炭片を含む土層が堆積していた。建物はピットの間隔・間数が著しく不揃いであり、むしろ土坑を囲む塀のようなものを想定したほうが適切かもしれない。

(3) 柱穴列 (第30図)

4列が16区で検出された。いずれも南北方向に走り、柱間隔は不定である。柵が想定され、やはり屋敷地を構成する要素の一つである。柱8は建13の西側にほぼ並行してあり、柱列の西側では上坑・ピットが著しく少なくなっている。柱9・10・11はやや向きを変えながら南北に連なるように存在し、屋敷地を東西に二分している。

(4) 土坑 (32～34図)

93基が検出され、うち56基を図化提示した。まず分布傾向をみると、16区では北西部、建物址周辺、南西部に群を認めることができる。17区では北端部、東縁部に分布が偏っている。

次に形態ごとにみてゆくと、まず火葬墓と考えられるものが2基(土191・190)あり、土191は焼骨、釘などを伴い典型的な形態である。土190はやや不明瞭だが、やはり塚が被熱している。これらは16区北端部の遺構の分布しない地域にあり、墓域かと考えられる。その点で、あるいは土189も墓址の可能性があり、墓址と考えるものはほかにはない。

次に特徴的なものとしては、炬ないしは囲炉裏状を呈する土156がある。プラン、被熱のあり方は101住の火処と類似し、方形の掘り方の底面中央が焼けている。周囲に建物と考えられるピットがみられないことから屋外の火処の可能性が考えられよう。その他、特徴的なものとして円形、すり鉢状の掘り方で、内部に礫が多量に集積される土148・155・164・168・181・222・230・272があり、土165・167・168・199なども礫が

伴わないが形態、位置からみて同種の遺構と考えられる。

これら以外の土坑としては円形ないし楕円形のプランで浅く平坦な底面のものが多数を占め、これに少数方形の土坑が伴う。また先述した建物址に付属するものとして土137・138・140・141・303がある。

土坑からの出土遺物は極めて少ないが、土140から土師質土器皿・筒状鉄器・鉤状鉄器、土170から龍泉窯系の青磁碗、土185・215からそれぞれ鉄器が出土している。土師質土器や青磁からみておおむね13世紀代の遺構が主体かとする。なお土223・227は覆土がほかの中世の遺構に比べ明るく、時期が下る可能性がある。

(5) ビット (第5・7図)

総数118基が検出された。ほとんどが円形の柱穴様の形態で、あるいは建物址や柱穴列を構成するものもあろうかと思われるが、明確な配列をなすものはなかった。その分布は16区、建13・14の周囲、101住から建21・22にかけての一带に集中する傾向がうかがえる。ビットからの遺物の出土はほとんどないが、そのあり方からみてほかの独立柱建物址、土坑などに伴うものと考えて差し支えなからう。

(6) 溝状遺構 (第5図)

16区北部、調査区西縁に沿って溝10、建13・15・17の北縁に沿って溝9が検出された。いずれも基底部を残すのみで、非常に浅い。当初その位置的関係から屋敷地を囲む区画溝とも考えたが、覆土がほかの中世遺構に比べて明るく、かなり上層から掘りこまれているので、中世以降のものと考えたほうがよいかもしれない。なお直接に帰属時期を示す遺物は出土していない。

第2表 竪穴住居址・竪穴状遺構一覧

住居 番号	地区	平面形	規 模		主軸方向	カマド 位置	遺 構 所 見	特 記
			長×短×深(m)	床面積				
32	16区	長方形	440×360×12	(13.8)	N-0°	なし	100住に切られる。床面は黄褐色土を貼り、明瞭・平坦である。西壁下北寄りにはわずかに焼土面があるが、カマドとは考えられない。遺物は少ない。	5 1 6
54	16区	方 形	448×7×26	(15.4)	N-0°	不明	97住に切られる。中央部に南北に長く帯が集中的に投げこまれる。床面は黄褐色土層中にあり、明瞭かつ平坦である。P2・4は柱穴とも捉えられるが、西側に対応するものが見当たらない。遺物は比較的少ない。鉄滓1点出土。	2
82	16区	不明	?×452×26		N-5°-W	不明	97住に切られる。暗褐色土中に掘りこまれ、床面は不明瞭である。遺物は皆無に等しい。	2 1 3
92	16区	長方形	448×400×12	(15.9)	N-0°	不明	112住を切る。103住・建11・12に切られる。カマドをもたない建物と考えられる。床面は不明瞭で、遺物も少ない。P1は深さ的には柱穴と捉えられるが、ほかに対応するものがなく不明である。	2 1 3 7
96	16区	方 形	932×852×44	71.1	N-90°-E	東壁中央 粘土	82件を切り焼14に切られる。97住に貼られる。大形のカマドの左手前貼床下には拡張前の旧カマドと思われる焼土面が存し、拡張を行ったらしい。柱穴は判断とせず礎石建ちの可能性が高い。遺物はカマド両脇、東壁下の床下に須恵器を主体とした杯・蓋類が残される。墨書土器・甲斐型杯・関東系の杯などが出土。	4
97	16区	長方形	1012×904×36	83.6	N-89°-E	東壁中央 石 組	54件を切り96住を貼る。焼14に切られる。4本主柱の礎石建物である。主柱の礎石は花崗岩を用い、P2・3は当初竪立柱としたのか深い掘り方を有し、P2では礎石下埋土に柱影が認められる。各礎石は被熱している。主柱間の床面は一段低い。墨書土器6点・円面鏡・甲斐型杯・鉄器8点・鉄滓1点などが出土している。	6
99	16区	不明	?×?×2		N-90°-E	東壁中央	土146・212に切られる。壁を失い、明瞭に貼られる床面のみ残存する。カマドは火床面のみ残り、北東隅付近に須恵器蓋、磨先各1点があるほかは遺物はない。	4 1 6
100	16区	長方形	512×468×36	20.1	N-82°-E	東壁中央 石 組	32住を切る。床面は黄褐色土層中にあり、堅硬である。内壁南寄りには小ピットを伴う突出しがある。顕著に被熱硬化し、鍛冶炉の可能性が高い。遺物は鉄器の出土量が多く、刀了4点・釘1点・鍔1点のほか2点の鉄滓がある。刺書・墨書土器3点出土。	7
101	16区	長方形	466×396×14	14.5	N-4°-W	床面中央	床面は硬く、鉄分の沈着が顕著である。P1～P4は主柱穴と捉えられる。周囲に比して低い床面中央には方形の掘りこみがあり、中央部～北側の肩にかけて強く被熱している。内部からは土師質土1点が出土している。ほかに鉄鏝、鉄錐がある。土器からみて13世紀代の遺構か。	中 世
102	16区	長方形	472×420×36	17.3	N-3°-W	なし	116住を切る。カマド・柱穴は見当たらない。床中央には隅長方形の落ちこみが見られる。遺物は少ない。墨書土器1点出土。住居址と異なる性格の遺構か。	7
103	16区	方 形	340×340×28	8.9	N-89°-E	東壁中央 石 組	92・112住、建11・12を切る。床面は92住とはほぼ同レベルにある。貼床は薄く不明瞭。カマドは掘出し部分の天井石3個が残存し、支脚石を伴う燃焼室内には土師器残片が残される。ほかに刀子・鏝など鉄器類が4点出土、西壁下には弥生時代の石包丁が置かれていた。	7
109	16区	方 形	400×400×32	13.6	N-0°	なし	建18に切られる。暗褐色土層中に構築され、検出困難な遺構であった。カマドは検出されず、黄褐色土を貼った床面上から6基のピットが検出された。遺物は少ない。鉄鏝1点・鉄釘2点が出土。	3
110	16区	方 形	584×500×48	18.4	N-93°-W	西壁中央 粘 土	壁は深く垂直に掘りこまれるが、南壁には階段状の作り出しがある。東壁北寄りに旧カマドがあり、左脇のP1は貯蔵穴と捉えられる。新カマドは袖、煙道を良好に残す。カマド手前のP3は蓋面が被熱している。北西隅からは刺書のある須恵器杯が出土した。	3

住居地	地区	平面形	規 模		主軸方向	カマド位置	遺 構 所 見	階 級
			長×短×深(m)	床面積				
112	16区	長方形	464×388×24	(17.0)	N-97°-W	不明	92・103住、建11・12に切られる。残存範囲でカマドは検出されず、育さないものとられる。床面は暗黄褐色土層中にあり、締まりがない。遺物は少ない。	2 1 3 ?
113	16区	不明	?×304×10		N-71°-W	不明	建10に切られる。床面は不明瞭で、タタキ床など、観察されない。中央部には焼土と炭化材が認められる。遺物は土師器小壺が床に残されていた。	2 1 3
114	16区	方形	400×392×16	(13.5)	N-82°-E	なし	建18・土208～210に切られる。暗褐色土層中に構築され、焼土・炭粒が敷る以外覆土の分別は難しい。カマドは検出されず、床面の一部には黄褐色の貼床がなされる。遺物は少ない。通常の住居址とは異なるものか。	2
115	16区	方形	420×412×28	14.7	N-9°-W	なし	焼土5を切り、焼土2に切られる。カマド・柱穴など認められない。床面は西壁下に焼土を多量に伴う堅緻な貼床が観察される。その上部覆土中には壁と平行に稜列が設けられるが、床面からは厚く。鉄滓が4点出土し、周囲の焼土も含め厳密に関連する遺構か。	7
116	16区	長方形	448×352×24		N-16°-E	なし	109住に切られる。カマドなどの施設はみられず、住居址としてよいのか疑問を残す。床面は黄褐色土層中にあるが、あまり狭くはない。遺物は大量少なく、一物品などは得られなかった。	4 1 6
117	17区	不明	544×?×26		N-0°	不明	1次調査3区にかかる部分は未調査。隅丸の形態をなす。床面は礫混じりでタタキ床をなさない。緑釉陶器2点・鉄器・鉄滓1点出土。	12 1 13
118	17区	方形	396×378×6	(12.7)	N-90°-E	なし	119住、壁7、土261・237に切られる。床面は礫層中にあり不明瞭。カマドは見当たらない。遺物は少ない。	2
119	17区	方形	430×422×12	15.4	N-96°-E	東壁南隅石組	118・120住を切る。礫層中にあり、検出、床面の把握は困難を極めた。カマドとその右隣にあるP1以外、床面上の施設は検出されず、遺物も少ない。覆土中への礫の投げこみは中央部に観察された。	7
120	17区	方形	416×402×22	13.4	N-87°-W	西壁中央石組	119住に切られる。礫混じりの層中に床面が設けられ、覆土との分別は不明瞭である。袖・火床面を残すカマドのほか5本のビットが検出されたが、いずれも浅く柱穴は見当たらない。遺物は少ない。	5 1 6
121	17区	方形	592×520×26	24.6	N-82°-E	東壁北隅石組	146・149・152住を切る。床面は礫混じりだが非常に堅緻。P1～4は柱穴である。東壁下には貯蔵穴様のビットが5基検出され、P8内には食器類が礫とともに残され、緑釉碗(145住と接合)も出土。鉄器関係では鉄鏝3点に加え、るつばに用いた土師器杯、鉄滓1点が出土。	15
122	17区	長方形	590×476×46	21.4	N-16°-E	北壁西隅強出	138・152住、土260を切る。黄褐色土層中には床面は非常に堅緻なタタキ床をなす。西壁中央には階段状の施設が設けられる。カマドは天井部が失うが、トンネル状の煙道、土坑状の煙出しなど残存良好である。遺物は少ないがカマド南西に礫の集積が行われる。	5
123	17区	不明	?×300×24		N-9°-E	不明	大部分が調査区外にあるため詳細は不明である。明瞭な床面の中央部に土師器杯・小壺が残されていた。墨書土器1点が出土した。	7 1 8
124	17区	長方形	480×378×24	15.3	N-100°-E	東壁中央石組	短軸上にカマドを有する。覆土中には中央部に集中して礫の投げこみがみられる。カマドは火床面と両袖を残す。8本のビットはいずれも浅く、柱穴は見当たらない。墨書土器1点・刀子1点が出土。	7
125	17区	長方形	430×320×28	10.0	N-0°	北壁東隅	127住を切る。東よりを中心に礫の投げこみが顕著である。カマドは袖が失い、柱穴などはみられない。カマドの前方、南寄りの床面には炭片の集積がみられる。緑釉陶器碗が1点出土した。	11 1 13
126	17区	長方形	424×404×22	11.0	N-90°-E	東壁中央石組	隅丸の形態をなす。壁は傾斜が強い。床面は礫混じりの層中にあり、軟弱である。遺物はカマド・南隅の床面に集中してみられた。食器類が主体である。墨書土器2点・刀子・釘各1点が出土。	7

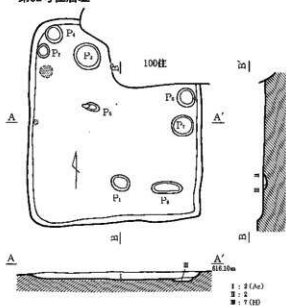
住居 No.	地区	平面形	規 模		主軸方向	カマド 位 置	遺 構 所 見	時 期
			長×幅×深 (m)	床面積				
127	17区	長方形	400×360×8	(12.1)	N-113°-E	東壁中央 石 組	125住に切られる。障子中に構築され、床面は凹凸が激しい。カマドは火床面のみ残り、構築材の礫が数点散る。中～西部には礫の投げこみが多い。	5
128	17区	長方形	486×446×28	15.6	N-90°-E	東壁北隅 石 組	廃絶時に投げこまれたと考えられる礫が覆土中に散在する。カマドは天井部と左袖が壊される。床面は比較的硬い。壁は傾斜し、グラグラと床面に移行する。遺物は少なく、土師器杯が数点出土したのみ。	14 15
129	17区	長方形	448×370×18	13.3	N-90°-E	なし	131住を切る。130住に切られる。西北隅の覆土層中に壁上面が検出される。床面ははっきりせず、カマドなどの施設もみられない。遺物もきわめて少なく、竪穴状遺構とした方が適切か。	11 ?
130	17区	長方形	308×270×16	6.7	N-90°-E	なし	129住を切る。129住と同様な特徴を示す。竪穴状遺構として捉えた方がよいかもしれない。	11
131	17区	長方形	472×414×48	15.3	N-87°-E	西壁中央 粘 土	129住・壁7に切られる。礫混じりの黄褐色土層中に構築されるが、床面は貼床され非常に堅緻である。カマドは底形をとどめながら、火床面の両側に構築材と考えられる黄褐色粘土が堆積している。主柱穴は見当たらず、遺物も少ない。黒書土器1点出土。	6
132	17区	方 形	472×448×20	19.4	N-90°-E	東壁北隅 石 組	143住を切る。床面はカマド前～中央部で硬いが、ほかは軟弱。カマドの左壁は壁外に大きく張り出し、貯蔵施設と考えられる。遺物はこの部分の床面に食器類が数点置かれる。またカマド開口には目で蓋を被せた灰粘碗が置かれていた。ほかに縄1点が得られた。	11
133	17区	方 形	430×400×20	13.3	N-91°-E	東壁中央 石 組	礫混じりの黄褐色土層中に構築される。床面はタタキ床を呈し硬い。カマドは天井部を失い、焚口付近に土師器製の破片と食器類が置かれる。カマド南側、西壁上のP2に食器・壺類のまとまった出土がみられた。また覆土中には中央部を主体に礫が投げこまれる。	6
134	17区	方 形	468×460×18	(15.8)	N-80°-E	東壁北隅 石 組	土289・290に切られる。カマドは火床面のみ残り、内外に構築材の礫が散乱。カマド両側のP2・4は貯蔵穴と考えられ、P2には食器類が置かれる。柱穴は見当たらない。黒書土器2点・緑粘碗1点出土。	12
136	17区	方 形	538×528×38	21.6	N-93°-E	東壁北隅 石 組	壁1・特1・土306を切る。南壁が緩く張り床面は平坦で硬い。P1～P4が主柱穴と捉えられるが深くない。カマドは煙出しピットが付属するが、主軸線より北に偏る。遺物は南寄り床面に食器類が数点残され、緑粘片もみられる。鉄器は鎌2点・刀子・紡輪が出土。	13
137	17区	長方形	(440)×(352)×30	(12.9)	N-15°-W	不明	150住を切る。139・145住に切られる。遺構の大半が失われ詳細は不明。残存部分の床面は軟弱である。	9 10
138	17区	不明	?×444×36		N-90°-E	東壁中央 粘 土	土271を切る。122住に切られる。床面は堅緻なタタキ床で、中央部には炭を混じた堅緻な貼床が残される (P3)。北壁には張り出しが設けられ、カマドは袖・天井を失う。柱穴は確認されない。	6
139	17区	長方形	684×544×20	27.1	N-94°-E	東壁北隅 石 組	137・145・150住を切る。北壁に張り出しがある。東～南にかけて周溝が存し、拡張を示す。P2・5・6・10は柱穴か。カマド両脇には貯蔵穴がみられる。遺物はカマド～北東部に食器類が多出。南半部には礫の投げこみが顕著。黒書土器1点・刀子3点・紡輪1点・鉄棒1点出土。	12
140	17区	方 形	348×340×36	7.6	N-71°-E	東壁北隅 石 組	土276を切る。隅丸の形態を呈する。壁は傾斜して掘りこまれ、床面は明瞭で硬い。カマドは天井が破壊されるが土をよく残す。カマド内およびP9より食器類が多く出土する。黒書土器1点出土。	9
141	17区	長方形	422×382×18	13.3	N-90°-E	不明 南西隅?	143住を切る。礫混じりの黄褐色土層中に床面が設けられ、軟弱である。覆土中、特にP2上には礫が多い。P3はカマドの可能性はあるが、焼土などはみられない。緑粘片1点・縄1点・鉄棒1点出土。	14

住居 №	地区	平面形	規 模		主軸方向	カマド 位 置	遺 構 所 見	時 期
			長×短×深(m)	床面積				
142	17区	不 明	?×524×10		N-6°-W	北壁西隅 石 組	141住に切られる。床面中央、主柱穴と捉えられるP1・2・4に囲まれた範囲は非常に堅軟なクナキ床を呈すが、その周囲は軟弱でやや高まる。カマドは袖・天井共に破壊され、構架材の礎が散乱している。カマド周辺、南壁下の床面に食器・甕類などの遺物が多い。	13
143	17区	不 明	?×402×18		N-94°-E	北壁東隅 石 組	137・145住を切る。132住に切られる。覆土中には礎の投げこみが多く、全体に散在する。床面は薄く貼床を施す。カマドは住居主軸に対して斜めに開口し、左脇に貯蔵穴様の張り出しを伴う。カマド内より白磁製の破片、覆土中より弥生時代の石包丁が出土。	10
144	17区	方 形	340×320×8	9.0	N-86°-E	な し	掘りこみは浅い。床面は軟弱でしまりが無い。カマド、柱穴などまったくみられず、遺物も微量である。壁穴状遺構に含めた方が適切か。	不 明
145	17区	長方形	496×456×34	(17.8)	N-15°-W	西北隅 石 組	137・150住を切る。139・143住に切られる。雑混じりの黄褐色土層中に床面があり、締まりがない。覆土中には全体に礎の投げこみが多いが、遺物は少ない。カマドは火床面のみ残存。緑釉陶2点・瓶1点が出土。	10
146	17区	方 形	348×300×12	9.1	N-74°-E	東壁中央 張 出	土278を切る。121住に切られる。特異な平面形態を呈する。カマド内から煙道にかけて非常によく焼けており、周囲にまで焼土が広がる。カマドより排出されたと思われる焼土・炭が床面東半に堆積し、踏み固められていた。遺物は少なく柱穴も見当たらない。	2 1 3
147	17区	不 明	?×(348)×0			不 明	壁を削平により欠け、痕跡・平面形共に不明。南寄り床面より刀子・土鏃・須恵器片が出土した。	6
149	17区	長方形	?×288×30		N-112°-E	東壁中央 張 出	121・122住に切られる。152住の礎替えと捉えられる。床面は非常に堅軟で、顕著に被熱したカマド周辺には焼土・炭粒が散在する。4基のピットが存在するが、柱穴は見当たらない。遺物はカマド内に土師器甕、西壁下に須恵器甕があるほかは少ない。	2
150	17区	長方形	548×544×12		N-81°-E	不 明	137・139・145住に切られる。遺構の大半を失うが、南壁下の床面を残す。黄褐色土中にあり軟弱である。	10 ?
151	17区	長方形	310×276×32	6.4	N-73°-W	西壁中央 石 組	雑混じりの黄褐色土層中に構築され、カマドから中央部にかけては堅軟な貼床がなされる。カマドは両袖の石材を残すみだが、大きく壁外に張り出す掘り方を有する。遺物はきわめて少ない。	2 1 3
152	17区	不 明	?×292×40		N-23°-E	不 明	121・122住に切られる。149住に貼られる。南半部のみ残存し、床面には不整形のピットが認められる。遺物は皆無に等しく、149住とは建て替えの関係と推定される。	2
壁7	17区	楕円形	284×248×10	5.0	N-90°-E		118・131住を切る。土237に切られる。床面は平垣で131住と同レベルにある。大形の土坑とすべきか。	6 ?
壁8	17区	不 明	356×?×18		N-3°-W		礎層中に構築され、貼床などなされない。灰褐色の覆土も小礫が多い。遺物は見当たらない。	中 世
壁9	17区	不 明	286×?×4		N-0°		壁8とまったく同様なあり方を示し、砂利層中に構築され、覆土中にはまったく遺物が含まれない。	中 世
壁10	16区	方 形	360×348×24	19.1	N-60°-E		土214・215に切られる。覆土中に焼土・炭化物粒が目立ち、南壁沿いに遺物多い。黄褐色の床面は硬くないもの明瞭。P1・6・7・8は柱穴か。	2 1 3
壁11	17区	長方形	320×292×24	7.5	N-12°-E		特1・2を切る。136住に切られる。床面は136住とほぼ同レベルにあり、明瞭堅硬。覆土中には礎の投げこみがみられる。遺物はほとんどない。	11 12

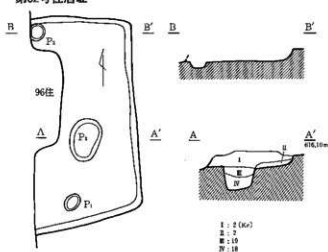
第3表 獨立柱建物址・柱穴一覽

建物No.	地区	平面形 柱配り	主軸方位 面積(m ²)	規模 (m)	柱間寸法 (m)	柱 穴			時 期	備 考
						平面形	規模(m)	柱径(m)		
10	16区	長方形 總柱式	N-6°-E (29.1)	3間×2間 714×408	桁行 228~248 (238) 梁間 180~216 (204)	円形	径 56~76 深 6~36	10基 φ16~24	113住を切る。 南辺に2間の柱列が付属。 奈良~平安時代	
11	16区	長方形 總柱式	N-5°-W 25.9	3間×2間 572×452	桁行 168~212 (191) 梁間 200~244 (226)	方形	長 42~66 深 28~56	10基 φ12~20	92・112住・土159より新、103住より古。また建12と重複。東辺に側溝、南辺に2間の柱穴列が付属する。P6内より七輪山土。平安時代	
12	16区	長方形 總柱式	N-5°-W 25.3	3間×2間 548×462	桁行 160~208 (183) 梁間 204~248 (231)	円形	径 42~66 深 14~40	10基 φ16~22	92・112住より新、103住より古、建11との前後関係は不明。 奈良~平安時代	
13	16区	長方形 總柱式	N-10°-E 38.4	5間×2間 960×400	桁行 168~220 (195) 梁間 188~216 (200)	円形	径 28~68 深 10~42	1基 φ16	土163より新。 土303は付属施設で、砕石が散り鉄分の沈着が著しい底面をなす。鉄器2点が出土。 中世	
14	16区	長方形 總柱式	N-3°-E 18.7	2間×2間 532×352	桁行 256~276 (266) 梁間 176~192 (176)	円形	径 24~48 深 18~48		桁行のP3・7は補助柱穴か。 中世	
15	16区	長方形 總柱式	N-87°-E 41.4 (54.2)	4間×3間 778×532	桁行 188~196 (195) 梁間 160~185 (177)	円形	径 24~52 深 18~46		北壁に1間×3間(162×584)、東壁に1間×1間(188×178)の庇が付属する。 中世	
16	16区	長方形 總柱式	N-84°-E 19.1	3間×2間 494×386	桁行 156~180 (165) 梁間 176~228 (193)	円形	径 48~66 深 24~46	10基 φ16~22	土198・199より古、P10・11は覆乱される。北辺に側溝、西辺に2間の柱列が付属する。 平安時代	
17	16区	方形 側柱式	N-2°-E 12.0	1間×2間 352×346	桁行 352 梁間 168~188 (173)	円形	径 36~58 深 16~22		土170より新。 中世	
18	16区	長方形 側柱式	N-2°-W 20.6	3間×2間 504×408	桁行 144~200 (168) 梁間 180~208 (204)	円形	径 40~68 深 12~72	2基 φ20	建15・土207より古。109・114住より新しい。 奈良~平安時代	
19	17区	長方形 側柱式	N-2°-W 3.6	1間×1間 226×164	桁行 212~240 梁間 144~172	円形	径 20~28 深 20~28		不整形。 中世	
20	17区	長方形 側柱式	N-90°-E 11.4	1間×5間 348×328	桁行 344~356 梁間 36~108	円形	径 18~50 深 4~24		不整形。 中世	
21	16区	長方形 側柱式	N-0° 28.9	(3×3間) 550×524	桁行 148~200 梁間 180~288	円形	径 30~56 深 8~46		不整形、土140・141を取り囲む。 土坑は緩く中央が窪み、底面に鉄分の沈着、壁上に木炭を含む。140から141へ遺り替えをしている。坑内から鉄器2点、土師質皿が出土。 中世	
22	16区	長方形 側柱式	N-86°-E 15.5	(2×2間) 432×356	桁行 208~440 梁間 160~356	円形	径 30~66 深 12~56		不整形、土137・138を取り囲む。 土坑は土140・141と同特徴を示し、同じ性格か。土138から137へと遺り替えを行う。 中世	
柱8	16区		N-3°-E	4間 660	92~220	円形	径 20~36 深 8~14		中世	
柱9	16区		N-5°-E	3間 456	96~212	円形	径 20~28 深 12~14		中世	
柱10	16区		N-5°-W	5間 732	112~184	円形	径 16~44 深 10~28		中世	
柱11	16区		N-1°-W	10間 1712	92~260	円形	径 24~88 深 12~58		中世	

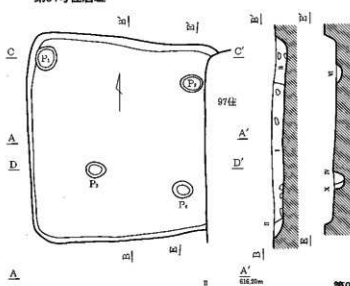
第32号住居址



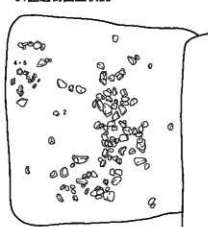
第82号住居址



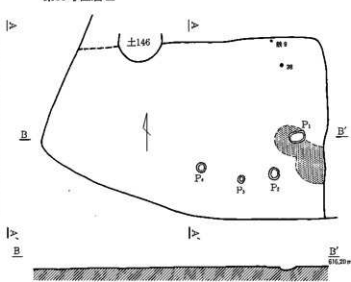
第54号住居址



54住遺物出土状況

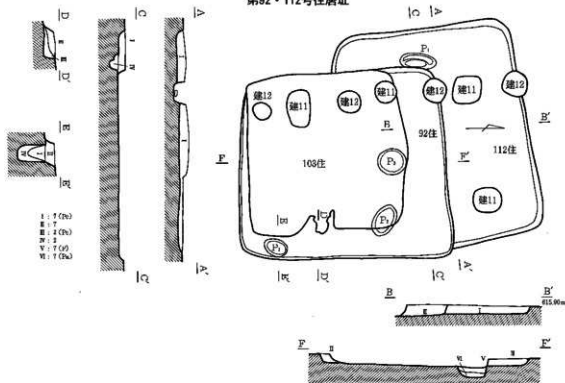


第99号住居址

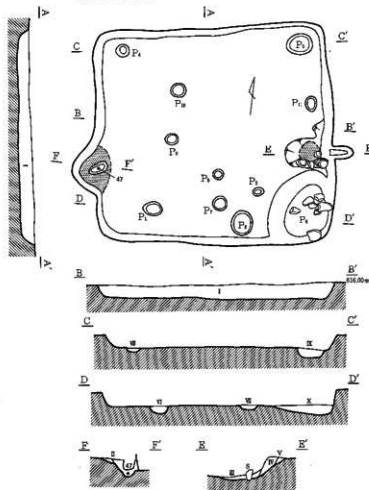


第8图 整穴住居址 (1)

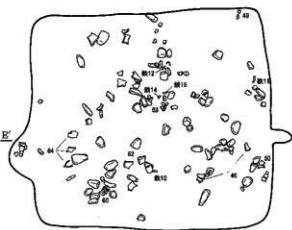
第92・112号住居址



第100号住居址



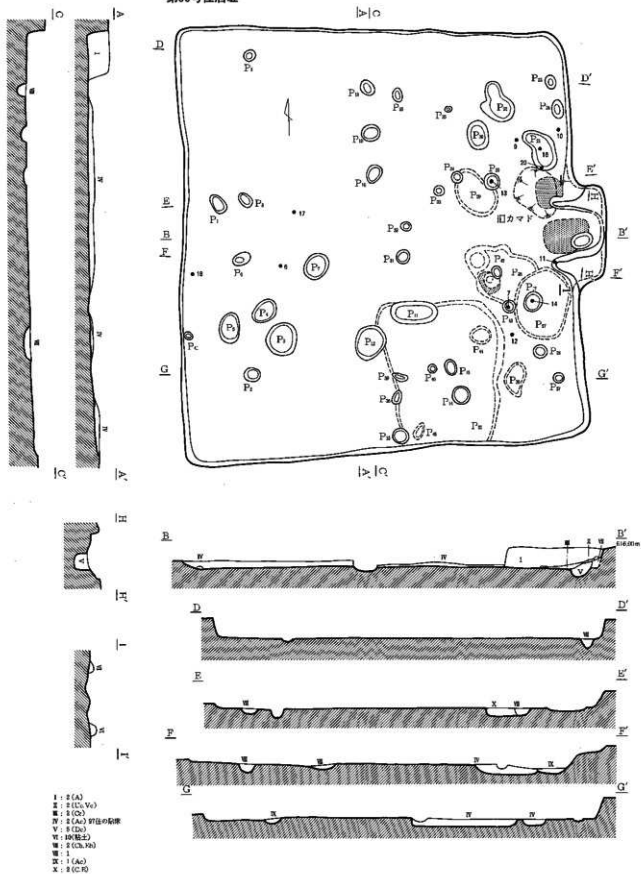
100住遺物出土状況



- I : 2 (Ac, P₁)
- II : 2 (C₁)
- III : 2 (C₂, C₃)
- IV : 2 (C₄, D₁)
- V : 1 (C₅)
- VI : 5 (C₆)
- VII : 2 (C₇)
- VIII : 1 (C₈, C₉)
- IX : 3 (C₁₀)
- X : 2 (A, D)

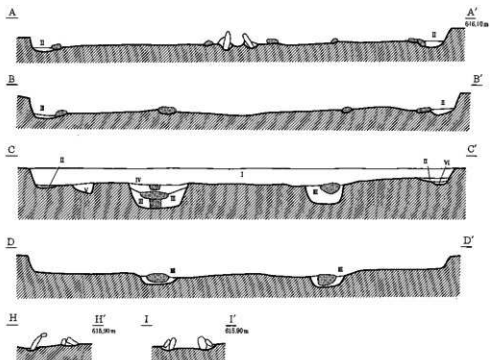
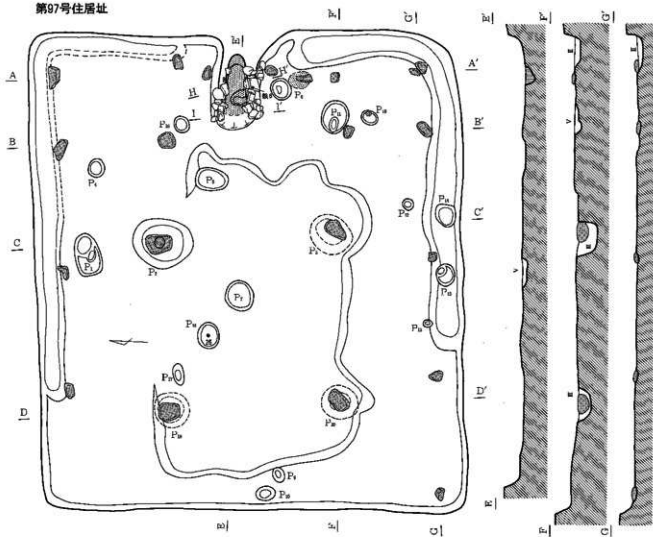
第9図 整穴住居址 (2)

第96号住居址



第10図 竪穴住居址 (3)

第97号住居址

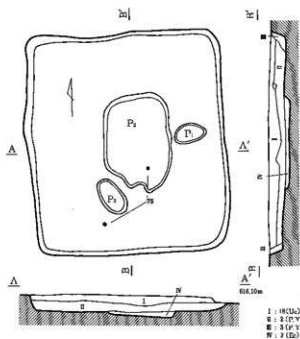


- I : 2 (An, Vb)
- II : 2 (Ab, Ib)
- III : 2 (Ac)
- IV : 1 (Aa)
- V : 2 (Au, Va)
- VI : 2 (Aa)

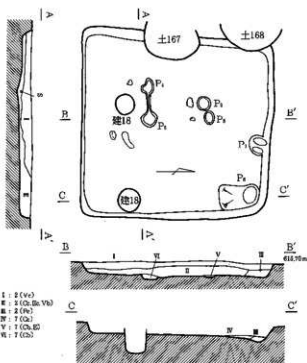


第11圖 竪穴住居址 (4)

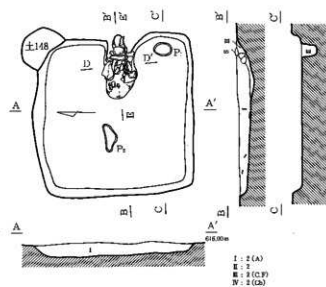
第102号住居址



第109号住居址



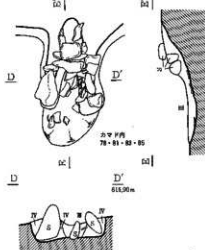
第103号住居址



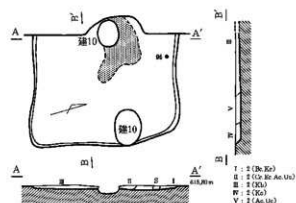
103住遺物出土状況



103住カマド細部図 (1 : 40)

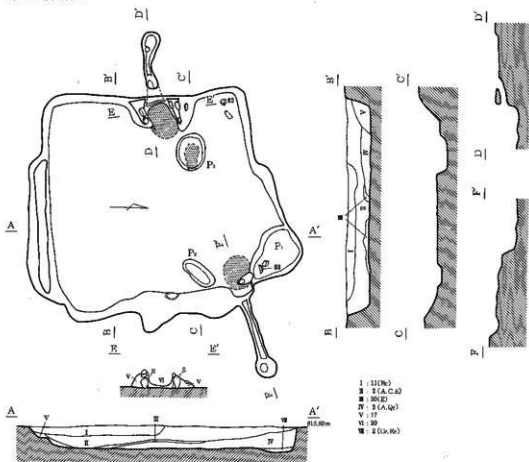


第113号住居址

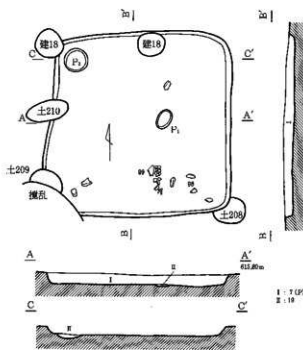


第12図 竪穴住居址 (5)

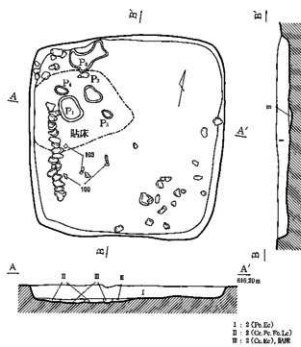
第110号住居址



第114号住居址



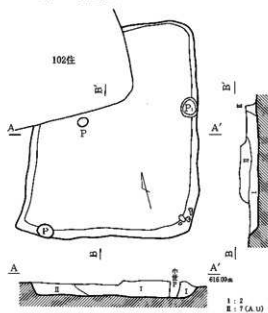
第115号住居址



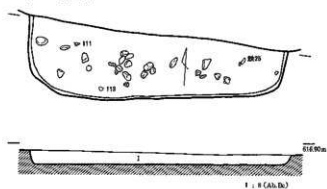
第13圖 竪穴住居址 (6)



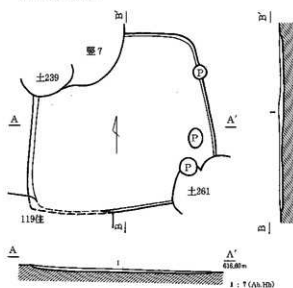
第116号住居址



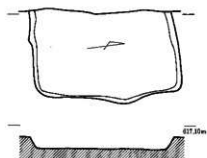
第117号住居址



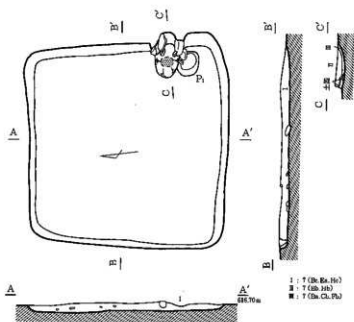
第118号住居址



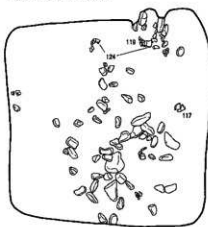
第123号住居址



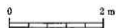
第119号住居址



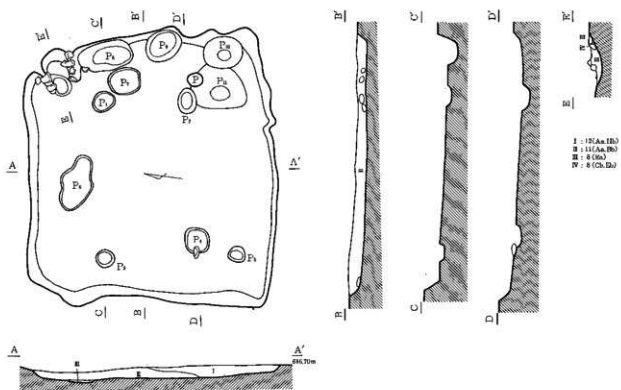
119号遺物出土状況



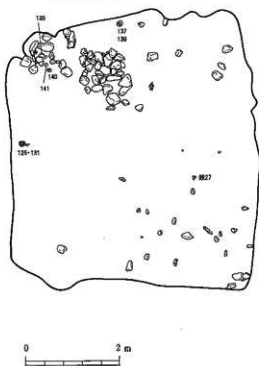
第14図 竪穴住居址(7)



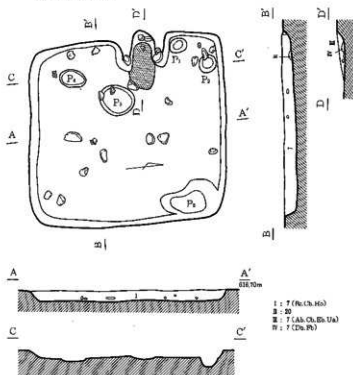
第121号住居址



121住遺物出土状況

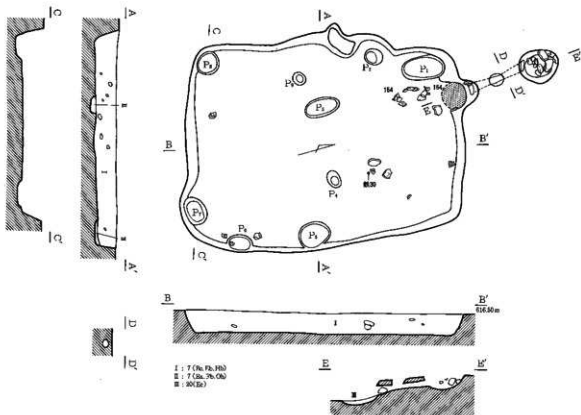


第120号住居址

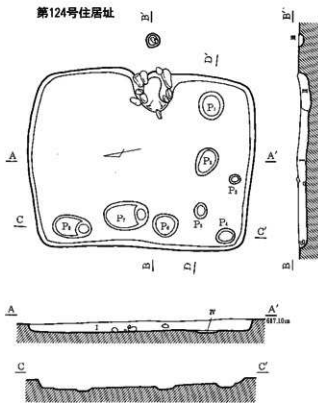


第15図 竪穴住居址(8)

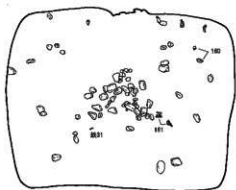
第122号住居址



第124号住居址

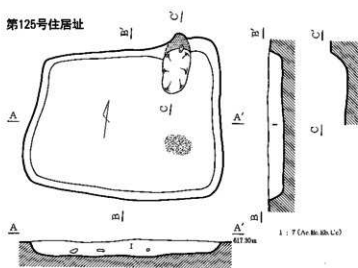


124住遺物出土状況

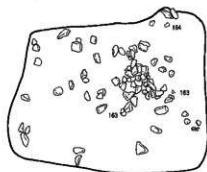


第16图 竪穴住居址 (9)

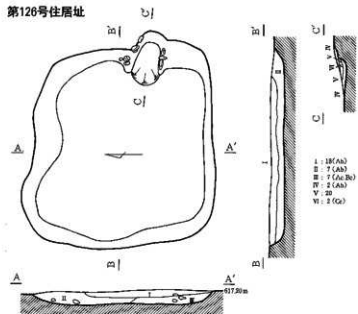
第125号住居址



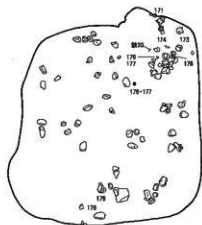
125住遺物出土状況



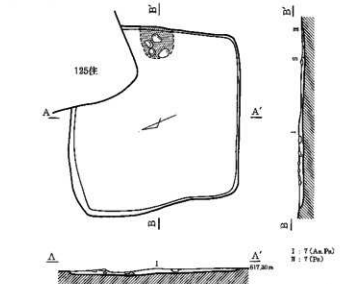
第126号住居址



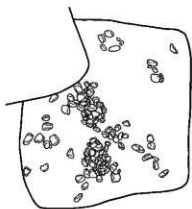
126住遺物出土状況



第127号住居址

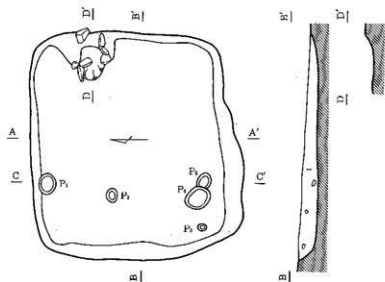


127住遺物出土状況

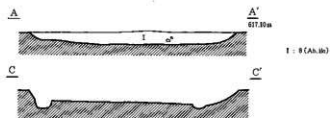
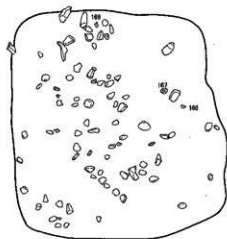


第17図 竪穴住居址 (10)

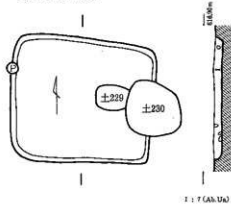
第128号住居址



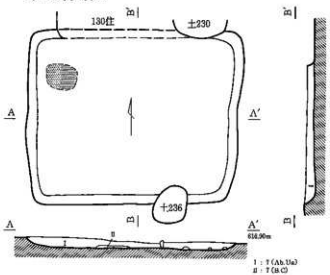
128住遺物出土状況



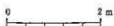
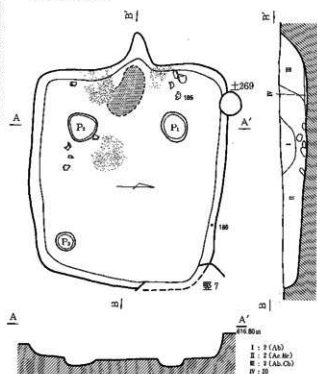
第130号住居址



第129号住居址

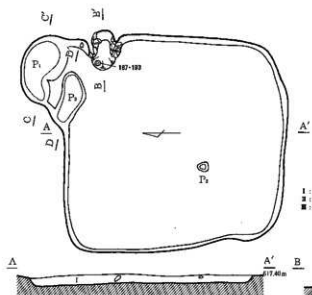


第131号住居址



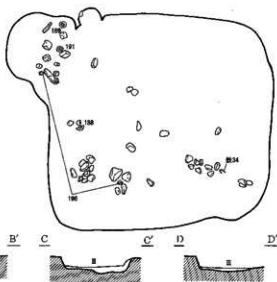
第18図 竪穴住居址 (1)

第132号住居址

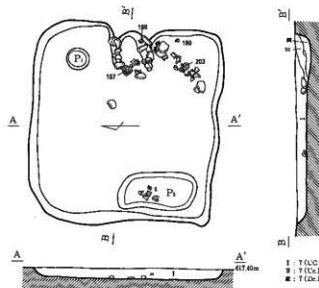


■ 1: T (Cb, Ab)
 ■ 2: (Ab)
 ■ 3: (Cb)

132住遺物出土状況

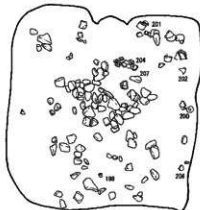


第133号住居址

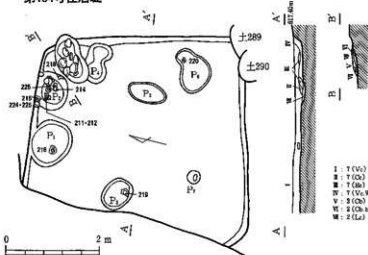


■ 1: T (C, Ab)
 ■ 2: T (C, La)
 ■ 3: T (C, P)

133住遺物出土状況



第134号住居址



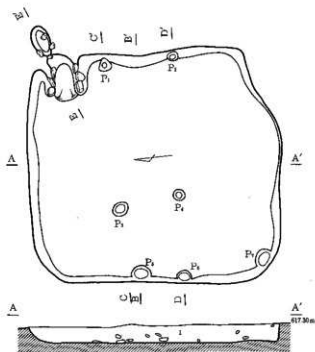
■ 1: T (V)
 ■ 2: T (C)
 ■ 3: T (Cb)
 ■ 4: T (V, W, L)
 ■ 5: T (C, La)
 ■ 6: 2 (Cb)
 ■ 7: 2 (La)

134住遺物出土状況

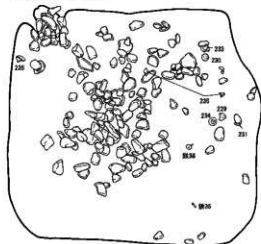


第19圖 竪穴住居址 (12)

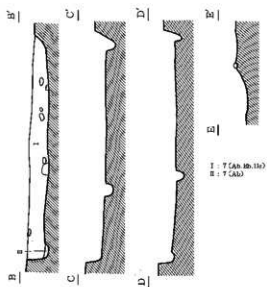
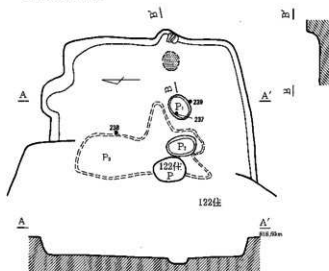
第136号住居址



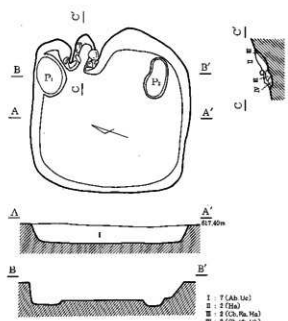
136住遺物出土状況



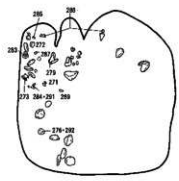
第138号住居址



第140号住居址

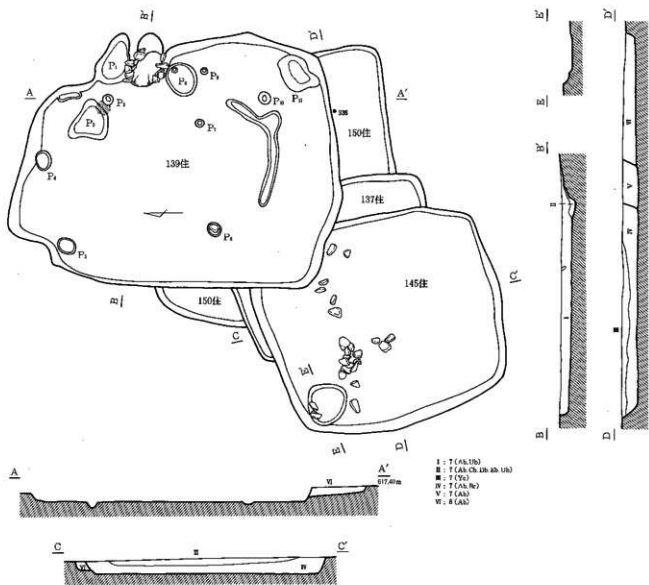


140住遺物出土状況

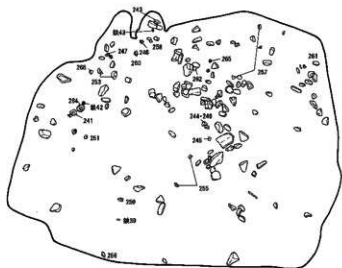


第20図 竪穴住居址 (13)

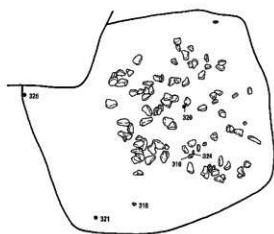




139住遺物出土状況

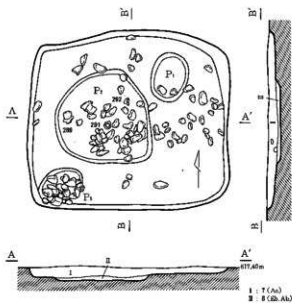


145住遺物出土状況

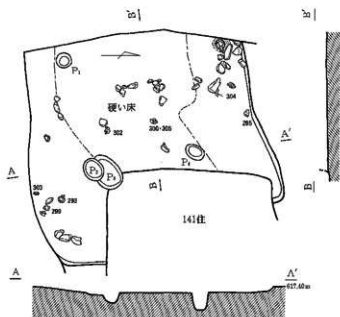


第21図 竪穴住居址 (4)

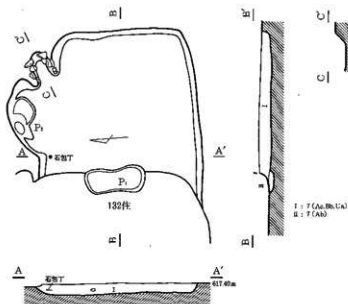
第141号住居址



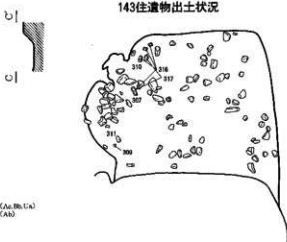
第142号住居址



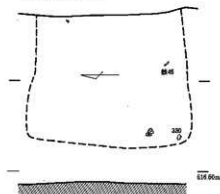
第143号住居址



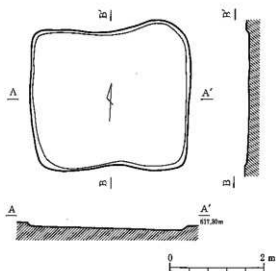
143住遺物出土状況



第147号住居址

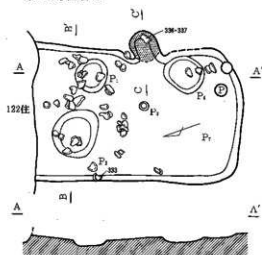


第144号住居址

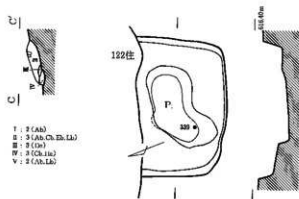


第22図 竪穴住居址 (15)

第149号住居址

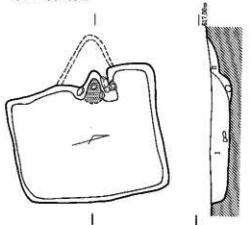


第152号住居址



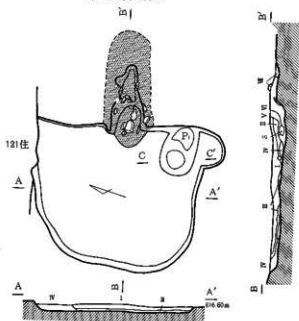
T : 7 (Ab)
 U : 5 (Ab, Ch, Dh, Lb)
 W : 3 (Lb)
 W : 3 (Ch, Lb)
 V : 2 (Ab, Lb)

第151号住居址

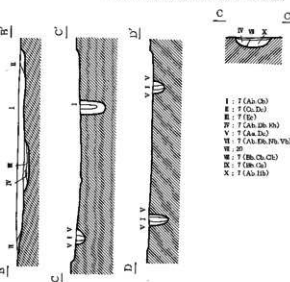
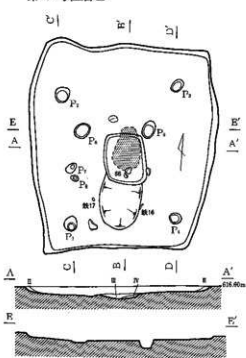


I : 1 (Au, Bu, Eb)
 J : 4 (Ab, Ea)

第146号住居址



第101号住居址



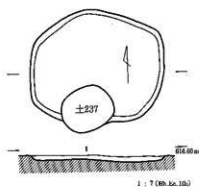
I : 7 (Ab, Ch)
 E : 7 (Cb, Dc)
 E : 7 (Cb)
 W : 7 (Ab, Dh, Kh)
 V : 7 (Ca, Dc)
 W : 7 (Ab, Dh, Fb, Yc)
 W : 30
 W : 7 (Bb, Ch, Cl)
 E : 7 (Cb, Ca)
 X : 7 (Ab, Bb)

I : 23
 E : 22 (Yc)
 E : 12 (Ab, Ch)
 W : 10 (Lb, Cc)
 V : 10 (Yc)

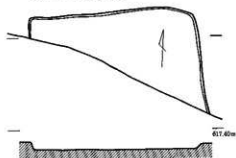


第23図 壑穴住居址 (16)

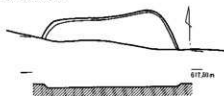
第7号竖穴状遺構



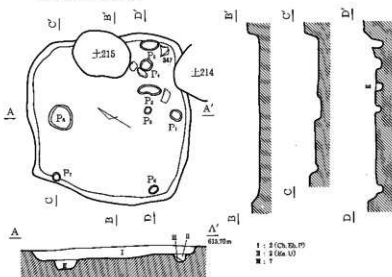
第8号竖穴状遺構



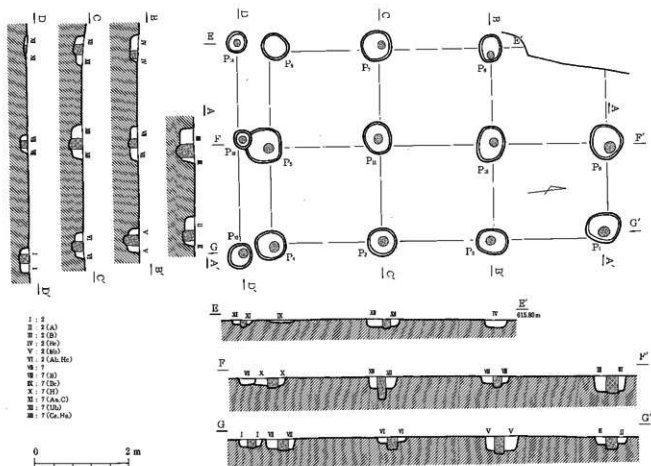
第9号竖穴状遺構



第10号竖穴状遺構



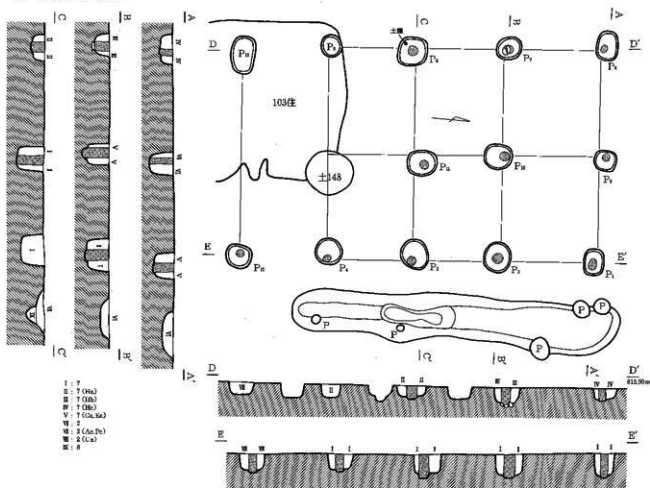
第10号掘立柱建物址



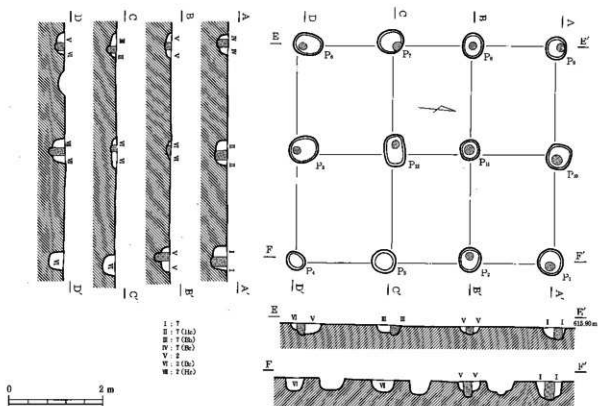
- I : 2
- II : 2 (A)
- III : 2 (B)
- IV : 2 (No)
- V : 2 (No)
- VI : 2 (No)
- VII : 2 (No)
- VIII : 2 (No)
- IX : 2 (No)
- X : 2 (No)
- XI : 2 (No)
- XII : 2 (No)
- XIII : 2 (No)
- XIV : 2 (No)
- XV : 2 (No)
- XVI : 2 (No)
- XVII : 2 (No)
- XVIII : 2 (No)
- XIX : 2 (No)
- XX : 2 (No)
- XXI : 2 (No)
- XXII : 2 (No)
- XXIII : 2 (No)
- XXIV : 2 (No)
- XXV : 2 (No)
- XXVI : 2 (No)
- XXVII : 2 (No)
- XXVIII : 2 (No)
- XXIX : 2 (No)
- XXX : 2 (No)
- XXXI : 2 (No)
- XXXII : 2 (No)
- XXXIII : 2 (No)
- XXXIV : 2 (No)
- XXXV : 2 (No)
- XXXVI : 2 (No)
- XXXVII : 2 (No)
- XXXVIII : 2 (No)
- XXXIX : 2 (No)
- XL : 2 (No)
- XLI : 2 (No)
- XLII : 2 (No)
- XLIII : 2 (No)
- XLIV : 2 (No)
- XLV : 2 (No)
- XLVI : 2 (No)
- XLVII : 2 (No)
- XLVIII : 2 (No)
- XLIX : 2 (No)
- L : 2 (No)
- LI : 2 (No)
- LII : 2 (No)
- LIII : 2 (No)
- LIV : 2 (No)
- LV : 2 (No)
- LVI : 2 (No)
- LVII : 2 (No)
- LVIII : 2 (No)
- LIX : 2 (No)
- LI : 2 (No)
- LXI : 2 (No)
- LXII : 2 (No)
- LXIII : 2 (No)
- LXIV : 2 (No)
- LXV : 2 (No)
- LXVI : 2 (No)
- LXVII : 2 (No)
- LXVIII : 2 (No)
- LXIX : 2 (No)
- LXX : 2 (No)
- LXXI : 2 (No)
- LXXII : 2 (No)
- LXXIII : 2 (No)
- LXXIV : 2 (No)
- LXXV : 2 (No)
- LXXVI : 2 (No)
- LXXVII : 2 (No)
- LXXVIII : 2 (No)
- LXXIX : 2 (No)
- LXXX : 2 (No)
- LXXXI : 2 (No)
- LXXXII : 2 (No)
- LXXXIII : 2 (No)
- LXXXIV : 2 (No)
- LXXXV : 2 (No)
- LXXXVI : 2 (No)
- LXXXVII : 2 (No)
- LXXXVIII : 2 (No)
- LXXXIX : 2 (No)
- LXXXX : 2 (No)
- LXXXXI : 2 (No)
- LXXXXII : 2 (No)
- LXXXXIII : 2 (No)
- LXXXXIV : 2 (No)
- LXXXXV : 2 (No)
- LXXXXVI : 2 (No)
- LXXXXVII : 2 (No)
- LXXXXVIII : 2 (No)
- LXXXXIX : 2 (No)
- LXXXXX : 2 (No)
- LXXXXXI : 2 (No)
- LXXXXXII : 2 (No)
- LXXXXXIII : 2 (No)
- LXXXXXIV : 2 (No)
- LXXXXXV : 2 (No)
- LXXXXXVI : 2 (No)
- LXXXXXVII : 2 (No)
- LXXXXXVIII : 2 (No)
- LXXXXXIX : 2 (No)
- LXXXXXX : 2 (No)
- LXXXXXXI : 2 (No)
- LXXXXXXII : 2 (No)
- LXXXXXXIII : 2 (No)
- LXXXXXXIV : 2 (No)
- LXXXXXXV : 2 (No)
- LXXXXXXVI : 2 (No)
- LXXXXXXVII : 2 (No)
- LXXXXXXVIII : 2 (No)
- LXXXXXXIX : 2 (No)
- LXXXXXXX : 2 (No)
- LXXXXXXXI : 2 (No)
- LXXXXXXXII : 2 (No)
- LXXXXXXXIII : 2 (No)
- LXXXXXXXIV : 2 (No)
- LXXXXXXXV : 2 (No)
- LXXXXXXXVI : 2 (No)
- LXXXXXXXVII : 2 (No)
- LXXXXXXXVIII : 2 (No)
- LXXXXXXXIX : 2 (No)
- LXXXXXXX : 2 (No)

第24图 竖穴状遺構・掘立柱建物址 (1)

第11号掘立柱建物址

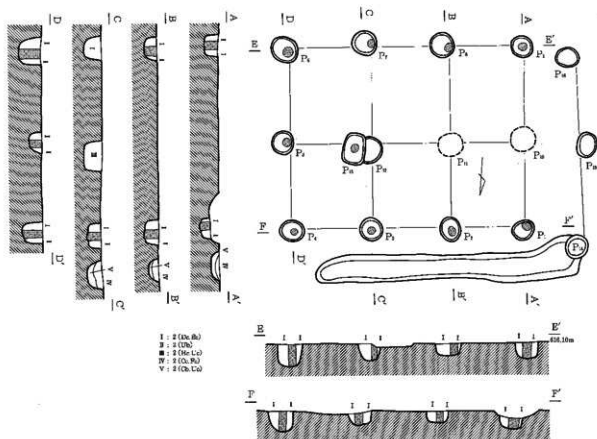


第12号掘立柱建物址

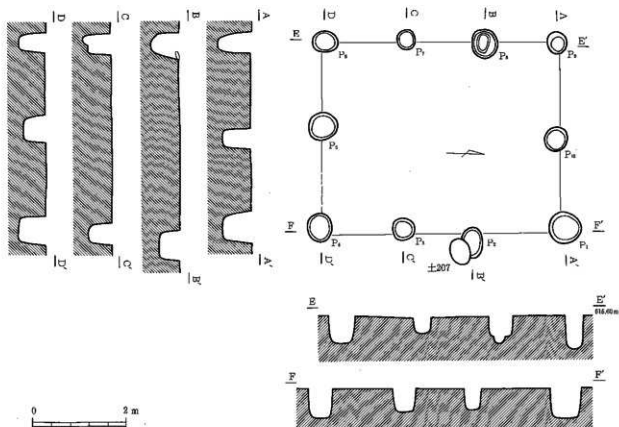


第25图 掘立柱建物址 (2)

第16号掘立柱建物址

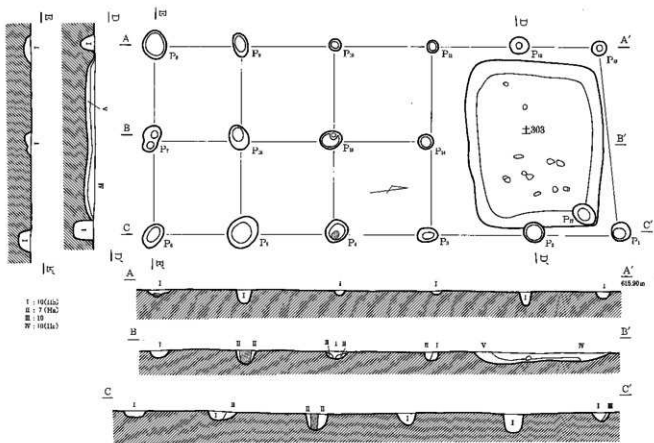


第8号掘立柱建物址

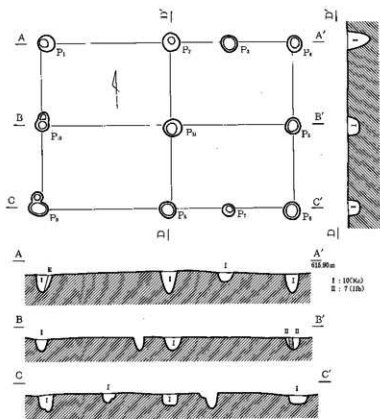


第26图 掘立柱建物址 (3)

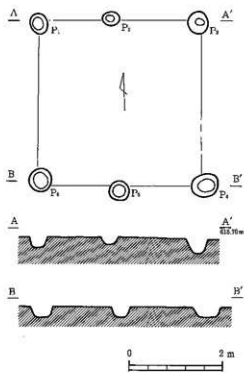
第13号掘立柱建物址



第14号掘立柱建物址

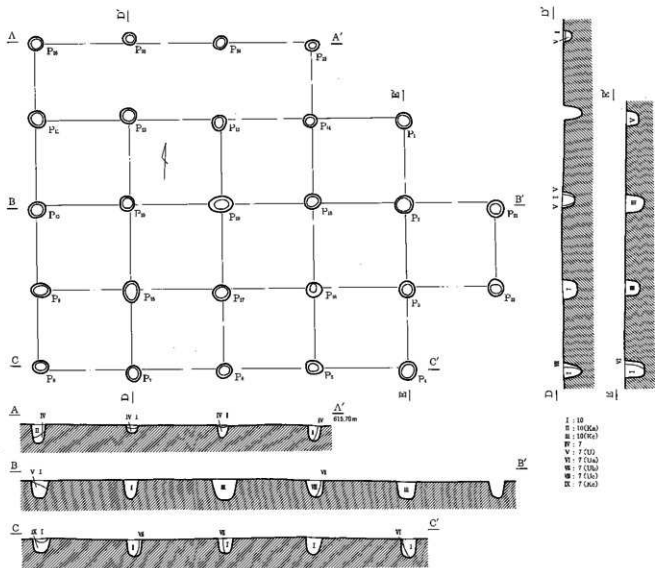


第17号掘立柱建物址

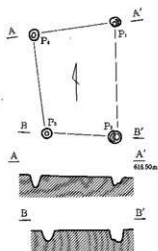


第27图 掘立柱建物址 (4)

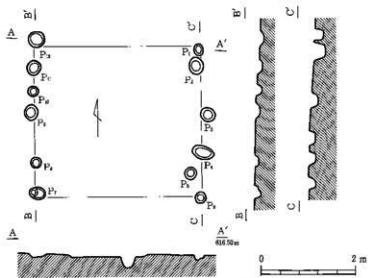
第15号掘立柱建物址



第19号掘立柱建物址

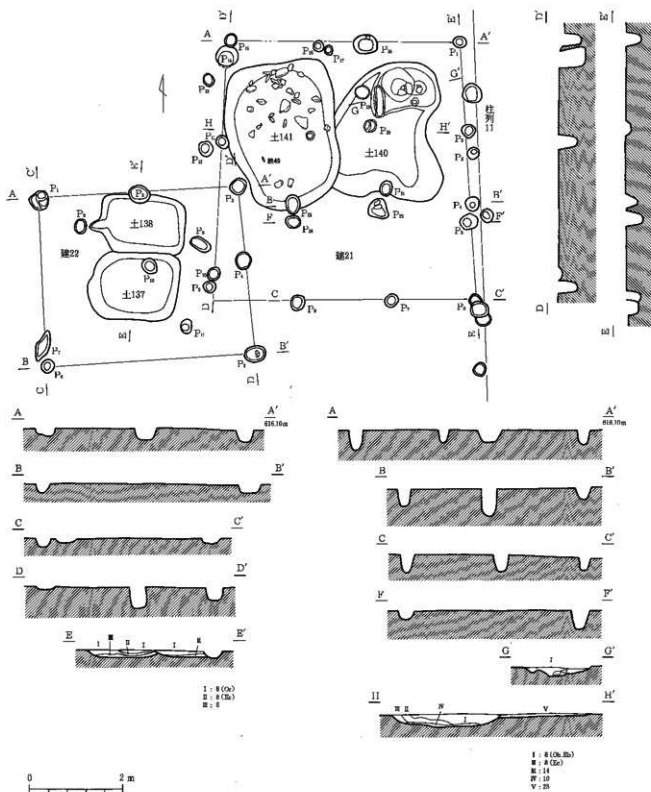


第20号掘立柱建物址

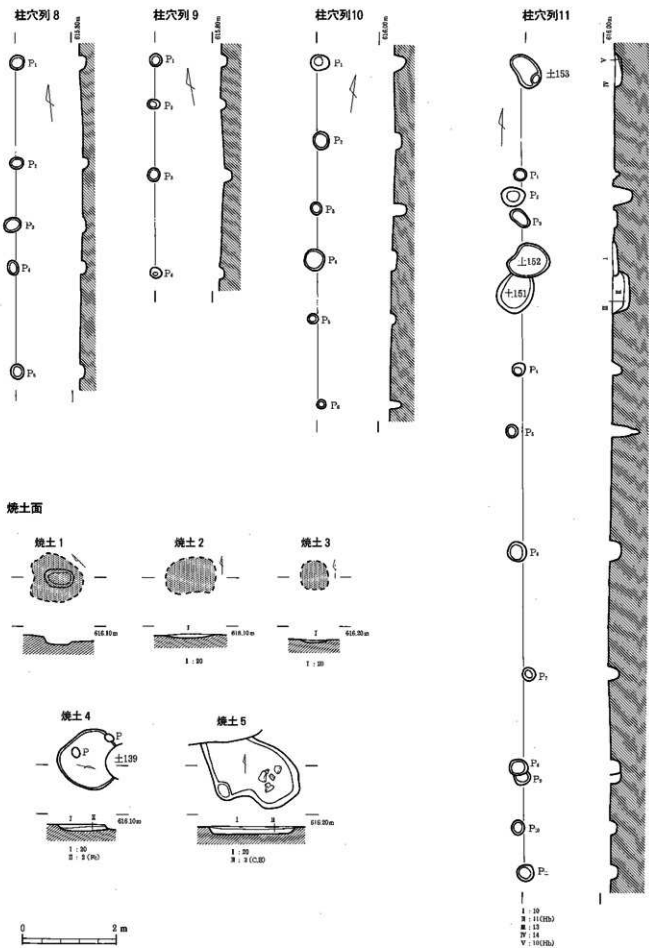


第28图 掘立柱建物址 (5)

第21・22号掘立柱建物址

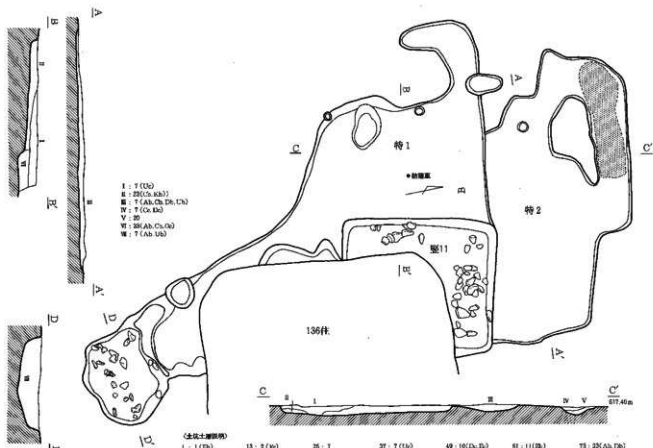


第29图 掘立柱建物址 (6)



第30图 柱穴列·烧土面

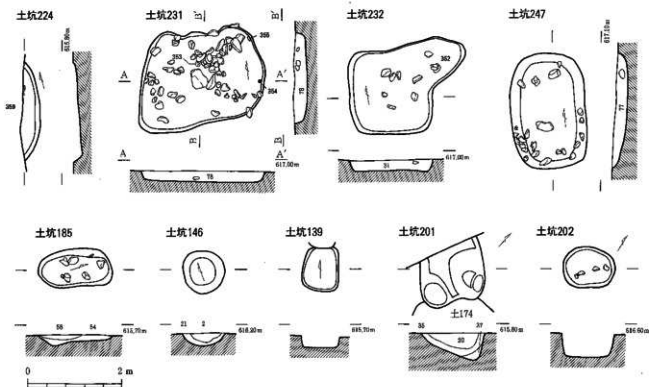
第1・2号特殊遺構、第10号竪穴状遺構



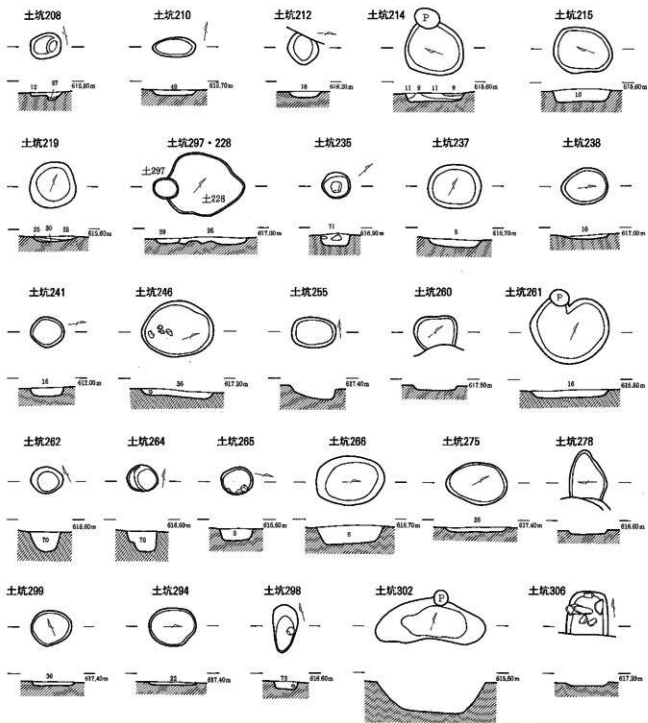
〈土坑土層関係〉

1: I (D)	13: 2 (A)	26: 1	37: 7 (A)	49: 10 (D, B)	61: 11 (B)	73: 25 (A, B)
2: 2	14: 2 (A)	27: 1 (A)	38: 1	50: 10 (E, C)	62: 11 (A)	74: 23 (A, K)
3: 2 (A)	15: 2 (C)	28: 1 (A, B)	39: 8 (A)	51: 10 (D, E)	63: 11 (D)	75: 25 (A, B)
4: 2 (A, Ch)	16: 2 (C)	29: 1 (A, C)	40: 10 (A, B)	52: 10 (A)	64: 11 (B)	76: 23 (A, K)
5: 2 (A)	17: 2 (C)	30: 1 (A, B)	41: 10 (A)	53: 10 (D, E)	65: 11	77: 25 (A, B)
6: 2 (A)	18: 2 (C)	31: 1 (A, B, C)	42: 10 (B, A)	54: 10 (D, E)	66: 17	78: 25 (A, B)
7: 2 (C, D)	19: 2 (B)	32: 1 (A)	43: 10 (B, A)	55: 10 (K)	67: 17 (A)	
8: 2 (C, B, C)	20: 2 (C)	33: 1 (A)	44: 10 (A)	56: 10 (A)	68: 20	
9: 2 (C, B, C)	21: 1	34: 1 (A)	45: 10 (B, K)	57: 10 (V)	69: 28	
10: 2 (C, B, V)	22: 1 (A, B, F)	35: 1 (A, C)	46: 10 (C)	58: 10	70: 22 (A)	
11: 2 (C, A)	23: 1 (A, B)	36: 1 (A)	47: 10 (C, B)	59: 11	71: 22 (A)	
12: 2 (A)	24: 1 (A)	38: 1 (C)	48: 10 (A, K)	60: 11 (A)	72: 23 (A, C, D, F)	

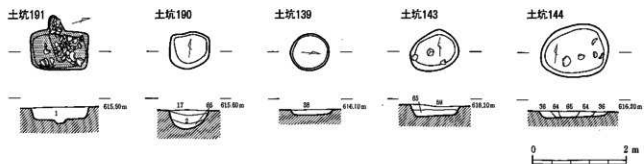
土坑 (奈良・平安)



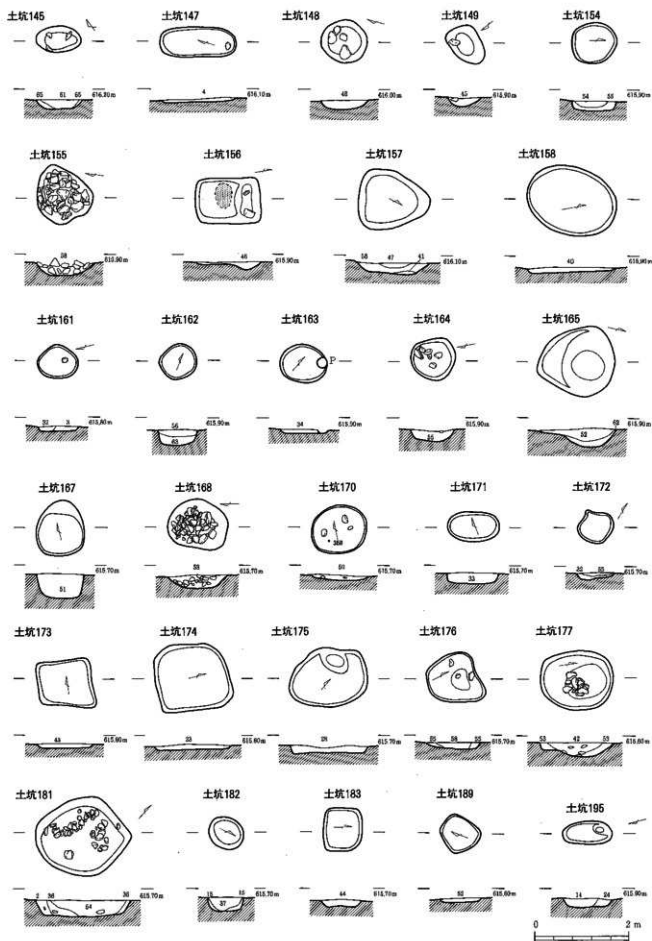
第31図 特殊遺構・土坑 (1)



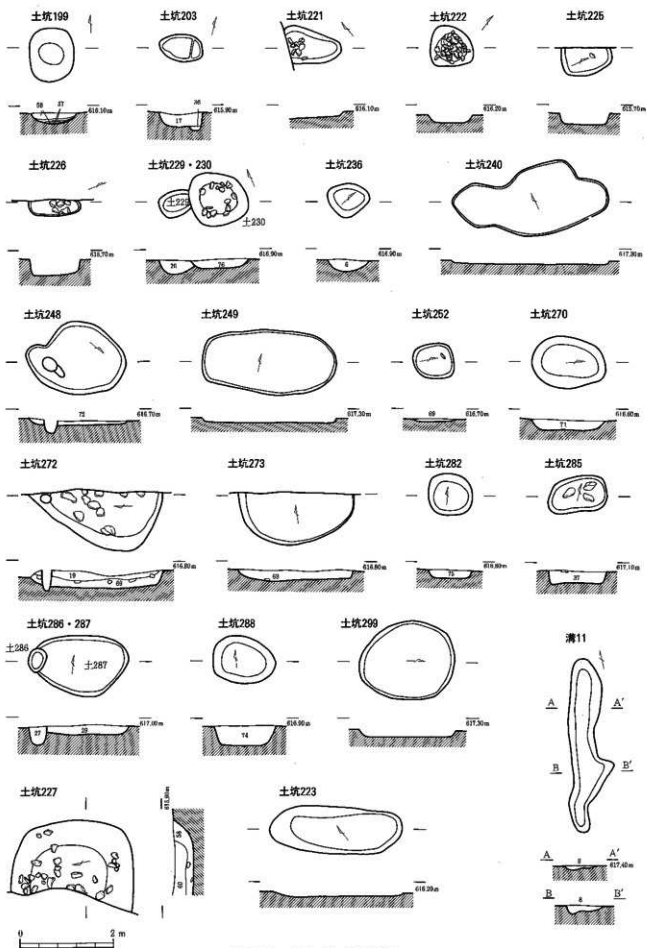
土坑 (中世)



第32图 土坑 (2)



第33图 土坑 (3)



第34圖 土坑(4)・溝狀遺構

3. 遺物

1 縄紋・弥生時代の遺物 (第47図)

この時代の遺構は未検出であるが、検出面、および古代・中世の遺構内から石器類の出土が認められた。器種としては打製石鏃(1~4)・磨製石鏃(5)・ピエスエスキュー(6・7)・打製石斧(8~11)・磨製石包丁(12・13)がある。大半は縄文時代のもと考えられるが、磨製石鏃と石包丁2点については弥生時代に位置づく。少なくとも小原遺跡周辺には弥生集落は確認されておらず、その到来も含めて興味深い資料である。

2 奈良・平安時代の遺物

(1) 土器・陶磁器 (第35~46図)

古代の土器・陶磁器類は総数382点を図化・提示した。その大半は住居址からの出土品で、総じて1期(7世紀末)~15期(12世紀前半)と幅広い時期のものがみられる。ここでは長野県埋蔵文化財センターによる松本平の土器編年(例言参照)に基づきながら、時期を追ってその様相を概観することとする。なお器種・器形の呼称や分類もそれに従っている。

1期(古墳時代・7世紀末) この時期の遺物は建18周辺の検出面から須恵器杯蓋A(366)が1点出土しているのみである。遺構からの出土品でないため確定できないが、366と近接して出土した373・370の須恵器杯もこの時期にさかのぼる可能性がある。

2・3期(奈良時代・8世紀前葉~中葉) 食器類の構成において古墳時代以来の形態である非ロクロ成形の土師器杯D(94・334)・Eから須恵器杯A(87・93・328・331・346・360)・B(90・91・332・333)、杯蓋B(2・3・86・88・89・96・339)に主体が移行する段階である。須恵器杯Aは底部へラ切りが主体で、3期からは回転糸切り未調整のものが加わる。煮炊具は厚手・長胴の土師器甕A(99・337)・B(5・115・336・347・361)、小型甕A(4)・B(95・97・98・382)が主体である。本遺跡では54・110・114・149住で比較的良好な一括資料が得られているが、1棟あたりの出土量は少ない。この時期にはいわゆる美濃須賀窯の須恵器杯B(333)・杯蓋B(339)が伴出する。

4~6期(奈良~平安時代・8世紀後葉~9世紀前葉) 食器類に占める須恵器の量が最も多い時期である。土師器は杯D・Eが消滅し、ロクロ成形の黒色土器A杯A(24・29・30・33・36・151・185・200・203・238)が出現する。須恵器は杯A(10~12・23・28・32・144・148・149・180・183・184・197~199・237・330)が回転糸切り未調整主体となり、杯B(14・27・145・150)は法量が多化する。煮炊具は土師器甕Aが消滅し、甕B(154・204・207)は6期に至って定型化・規格化を極める。小型甕も小型甕Aが消滅し、小型甕B(18)はロクロ成形・カキ目調整の小型甕D(19・34・37・239)へと推移してゆく。

遺構出土土器群としては96・97・122・133住から良好な資料が出土している。なおこの段階には土師器の杯にいわゆる甲斐型杯(杯C、15・25)、また土師器甕・小型甕に甕C・小型甕C(21)など、外来系のもものが伴う。96住出土の土師器杯(16)は盤状の形態、非ロクロ成形を特徴とし、胎土や底部のへラ削りに甕C・小型甕Cとの共通性がうかがえる。甕とともに関東地方、群馬県下のこの時期に通用の杯形態と考えられ、鉢師屋遺跡群など佐久平での出土例を知るものの、松本平での出土は大変珍しい。

7・8期(平安時代・9世紀中葉~後葉) 食器類は須恵器が衰退し、黒色土器A杯A(47~50・77・78・103・117~119・156・157・159・160・172・173)・椀(104・120・171)・皿(79・174)が主体を占める時期である。また8期には土師器杯A・椀が出現し、古相の灰胎陶器碗・皿(53・58~62・72・80)がわずかに伴う。煮炊具は土師器甕B(64・65・81・83~85・124・161・179)・小型甕D(158・176・177)が主体で、甕C(122・123)も伴う。

住居址出土資料は1棟あたりの出土量が比較的多い。100・103・119・126住で良好な資料が得られているが、8期は良好なものが少ない。

9・10期（平安時代・10世紀前葉～中葉）食器類は須恵器が姿を消し、黒色土器Aも急速に衰退、碗(281・327)だけが残る。代って土師器杯(266～278・306～310・318)・碗(279・280・319)が主体となり、灰軸陶器碗(282・283・311～314・326)・皿(323～325)も増加する。煮炊具は土師器甕Bがほとんどなくなり、はっきりしなくなる。小型甕もカキ目が次第に退化する。

この時期の一括資料は140・143・145住で出土しており、小さい玉縁口縁の白磁碗(315)やC・D類の緑軸陶器碗(320・321)・瓶(322)などの高級陶磁器も出土している。

11・12期（平安時代・10世紀後葉～11世紀前葉）食器が上器組成の主体を占める。土師器の主体となる杯A(194・208～210・241～246)は次第に小形化し、12期には2種類の量量となる。また新たな形態として盤B(211～213・249～252)や黒色土器B碗が出現する。灰軸陶器も多く、碗(192・193・219・258～261)・皿(187・191・216～218・253・254)・段皿(188～190・255～257)・鉢(263)などがみられる。煮炊具はこの段階から羽釜(195・196・262)が登場する。小型甕Dはカキ目調整が省略されるようになる。

住居址出土資料は132・134・139住で良好で、C・D類の緑軸陶器(222)もみられる。211・212は高台が短く、盤Bとしてはやや特異である。

13～15期（平安時代・11世紀中葉～12世紀前葉）前時期と同様の傾向が続くが、土師器杯A(125・126・129～140・142・166～168・288・293～298)は小形化がさらに進み、皿状の形態となる。また別に皿A(299)が新たにみられ、黒色土器A碗(289)や同B碗もわずかに存在する。灰軸陶器は各種みられるが(111・127・128・229～234・290・291・301～303)、底面に回転糸切り痕を残し、高台が断面台形や三角形の新しい形態のものが多くなる。煮炊具は羽釜(164・165・235・305)のほか、小型甕Dが姿を消し非ロクロ成形の小型甕E(287)が存在する。

住居址からの出土品は121・141・142住などで良好な資料が得られている。各遺構で緑軸陶器の出土が目立ち、D類(163・292)に加えE類(112・113)が多くみられる。

(2) 文字関係資料

文字関係の資料としては、硯、転用硯、墨書土器、刻書土器、窺書土器が出土している。

硯は97住から須恵器の円面硯1個体が出土した(22)。3片の破片から器形を復元すると硯面の直径10.1cm、高さ約5.4cmの小形、台形の形態となり、脚部外面には縦位にヘラで線刻を入れ、透かしの名残をとどめる。焼成は概して不良で、暗灰色軟質である。海の部分には摩滅がみられ、実際に使用されたことを物語っている。転用硯は確実なものとしては139住出土の灰軸碗(260)がある。口縁部を欠失するが、内面見込み部分の摩耗が著しく、朱墨が全体に付着している。

墨書土器および焼成後に刻まれる刻書土器は総数23点が山上した。時期別・種別にみると4～6期が8点(土師器・須恵器)、7・8期が8点(土師器・須恵器・灰軸陶器)、9・10期が2点(土師器・灰軸陶器)、11・12期が2点(土師器・灰軸陶器)である。器形はいずれも杯・碗で、刻書土器は7期の土師器に存在している(100住)。記入される部位はすべて外面で、底部(9点)または体部(9点)あるいは両方(2点)である。

文字の内容は判読不明なものが多いが、文字と思われるものがほとんどであり(16点)、字数は2字が1点あるほかはすべて1字である。「一八」(25)・「田」(33)・「人」? (36)・「大吉」? (55・57)・「又」? (10・29)・「代」? (157)などが文字の判読できる例である。

総じて傾向をみると、4～8期に墨書土器の量、出土遺構数のピークがあり、それ以降の時期では非常に少ない点を指摘しうる。4～6期はとりわけ大型住居址である97住からの出土が卓越している。

甕書土器は焼成前に底部外面に記号などが記されたもので、6点が出土した。須恵器では杯Aに「-」(373)・「大」?(93)があり、黒色土器Aでは杯・椀に「×」(104・152・203)・「-」(24)が認められた。生産時に記されたものと考えられよう。

(3) 土製品 (第46図)

3点出土している。うち2点(1・2)は土師質の土鍾で、147住と建11から出土している。胎土・形態・作りのよく似るもので、直径2.5~4mm程度の棒状具に粘土を雑に巻きつけ、紡錘形に成形している。1は3.3g、2は4.6gを測る。伴出する土器から6期頃のものと考えられる。紡錘車(3)も土師質で、特1から出土した。成形は丁寧で胎土良好、直径4.2cm・高さ2.3cmの台形を呈する。重さは48.4gである。

(4) 鉄器 (第48・49図)

1~15・18~44・50・61の合計44点を図化・提示した。完形品は少なく、器種の確定の難しいものも多いが、明確なものとして鎌(18・27・28・35・36・39・41)・刀子(1・2・4・8・11~14・19・31・32・42・45)・紡錘車(38・43)・鋸(15・34・44)・釘(6・33)・鋤先(9)などが出土している。鋸のうち36は雁股鋸である。34の鋸は脚が長く、門金具のように何かを差したり引っ掛けたりする用い方をしたものであろうか。25は分厚く細長い鉄板状を呈し、途中でくの字状に屈折している。一見鋤先のようにみえるが刃の作り出しがなく、器種は不明である。また何かの未製品の可能性もあろう。50は角棒の先端がドリル状になっている。釘の一種であろうか。鉄関係ではそのほか、鉄滓の出土がある。出土遺構は各時期にわたっており、54住1点、97住1点、100住2点、115住4点、117住1点、121住1点、139住1点、141住1点の合計12点を数える。大半が大小の塊状を呈し、比較的重いものである。また121住からは滓の付着した杯(142)が出土しており、埴埴の可能性も考えられ、鍛冶との関連をうかがわせる。

(5) 石器 (第47図)

砥石が4点(15・16・18・19)、敲石が1点(14)、浮子が1点(17)出土している。軽石製の浮子の存在は奈良井川、あるいは田川における漁労活動を想起させ、少数の出土ながら土鍾とともに興味深い資料である。

3 中世の遺物

(1) 土器・陶磁器 (第36・46図)

中世の土器類は極めて少ない。土師質土器皿2点、須恵質播鉢2点、青磁4点が出土し、4点を図化・提示できたのみである。土師質土器皿(66・356)は66が指オサエで成形したのち口縁部に横ナデを行い、356は指オサエのみである。須恵質播鉢(364)は暗灰色を呈し、摩擦の進んだ内面には粗い溝目が施される。青磁(358)は鉢蓮弁の碗で、ほかの細片とともに竜泉窯系のものである。

個々の時期比定は難しいが、竜泉窯系の青磁が13~14世紀代、土師質土器の皿は長野県埋蔵文化財センターによる法量を基軸とした分類(例言参照)ではA1類(66)とB2類(356)に当てはまり、12世紀末~13世紀後葉の年代とされている。確定は難しいが、これらのことと1~3次調査の状況からみて、出土遺物は総じて13世紀代を中心とした年代を与えて差し支えなからうか。

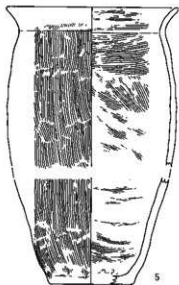
(2) 鉄器 (第48・49図)

16点(16・17・46・47・51~60)を図化・提示した。16は鐵ないし鍍鉍、17は鐸の可能性はあるが全形は不明である。46・51~60は釘、47~49は器種不明で、48は鉤状、49はラッパ状を呈するものである。

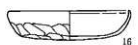
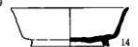
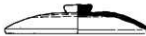
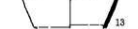
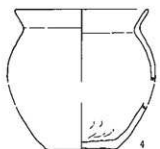
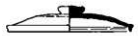
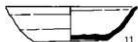
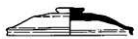
第32号住居址 (1)



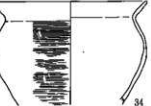
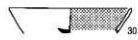
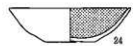
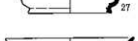
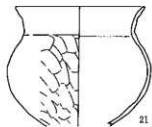
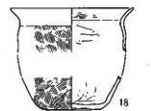
第54号住居址 (2~5)



第96号住居址 (6~21)



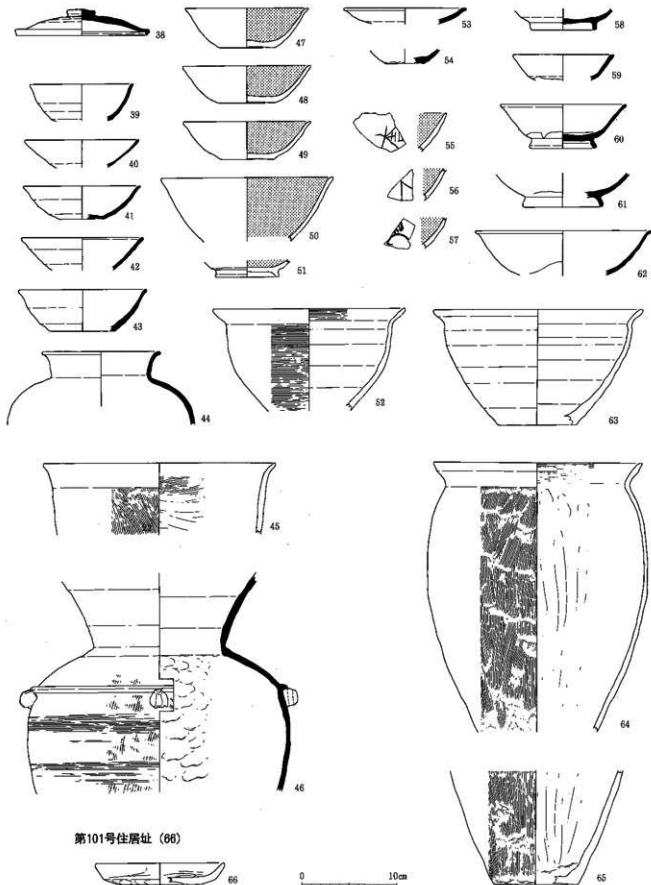
第97号住居址 (22~37)



第35图 土器 (1)

第99号住居址 (38)

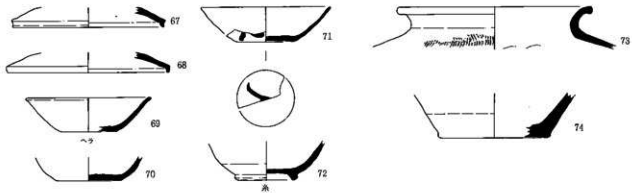
第100号住居址 (39~65)



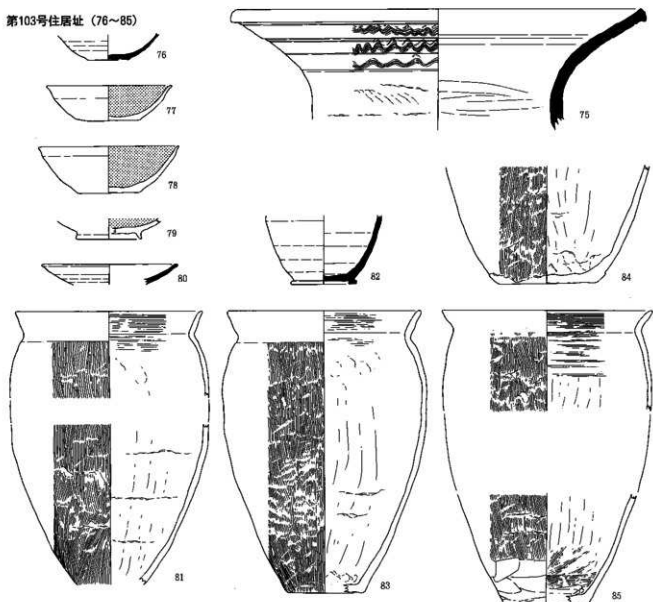
第101号住居址 (66)

第36图 土器 (2)

第102号住居址 (67~75)



第103号住居址 (76~85)



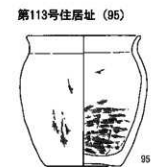
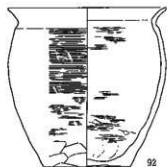
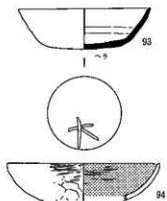
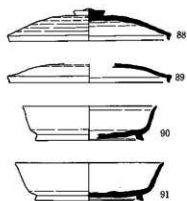
第109号住居址 (86・87)



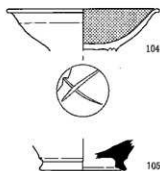
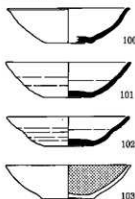
第37図 土器 (3)

0 10cm

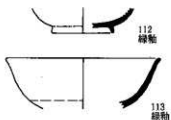
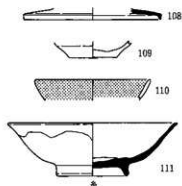
第110号住居址 (88~94)



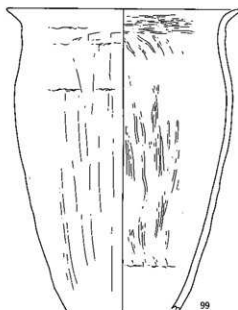
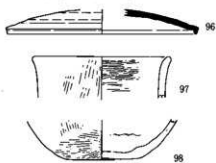
第115号住居址 (100~105)



第117号住居址 (108~113)



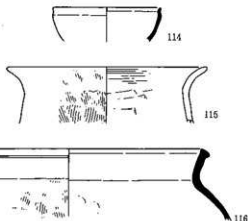
第114号住居址 (96~99)



第116号住居址 (106・107)



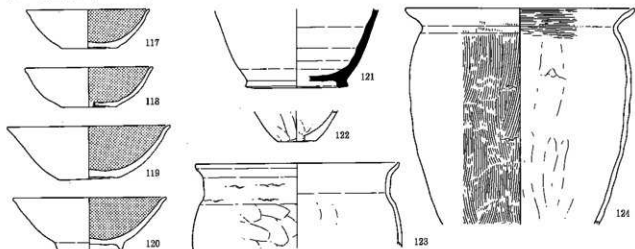
第118号住居址 (114~116)



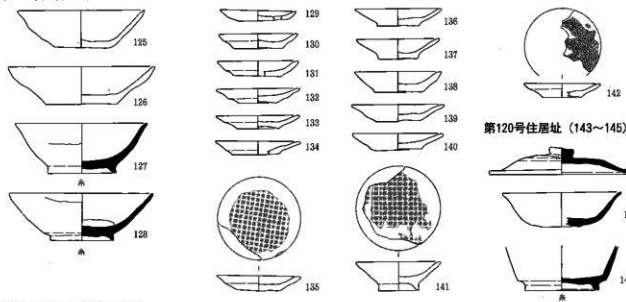
0 10cm

第38图 土器 (4)

第119号住居址 (117~124)

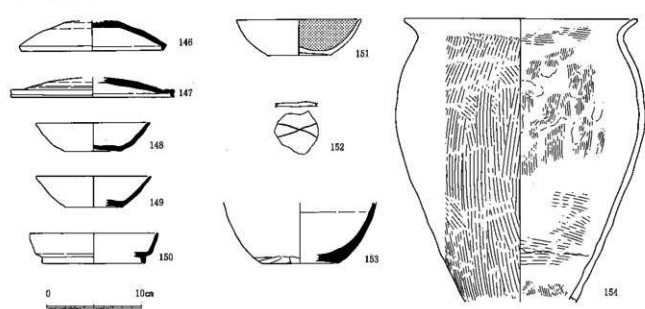


第121号住居址 (125~142)



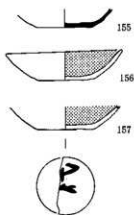
第120号住居址 (143~145)

第122号住居址 (146~154)

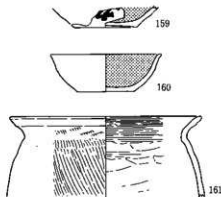


第39图 土器 (5)

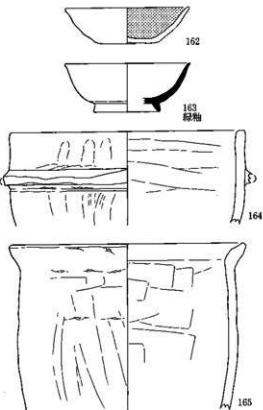
第123号住居址 (155~158)



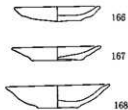
第124号住居址 (159~161)



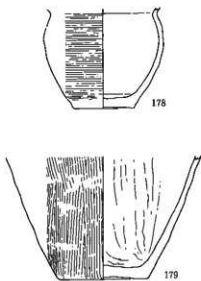
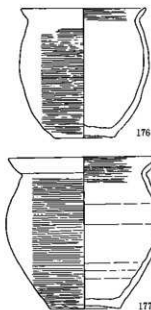
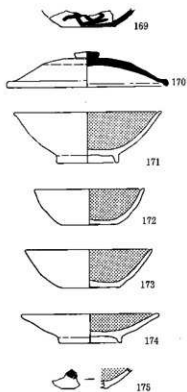
第125号住居址 (162~165)



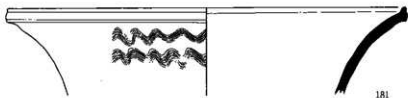
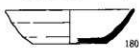
第120号住居址 (166~168)



第126号住居址 (169~179)

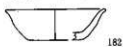


第127号住居址 (180~181)



第40图 土器 (6)

第130号住居址 (182)



182

第131号住居址 (183~186)



183



184



185



186

第132号住居址 (187~196)



187



188



189



190



191



192



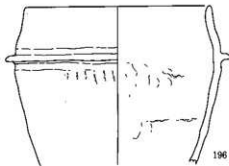
193



194



195



196

第133号住居址 (197~207)



197



198



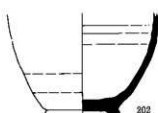
199



200



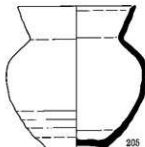
201



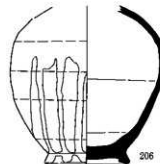
202



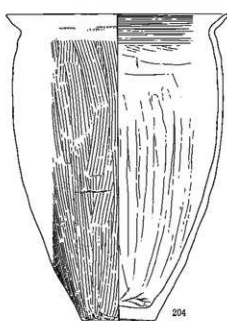
203



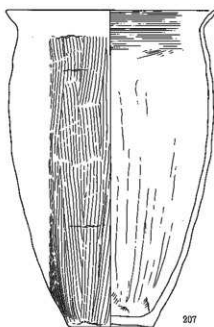
205



206



204

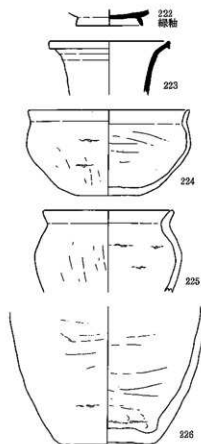
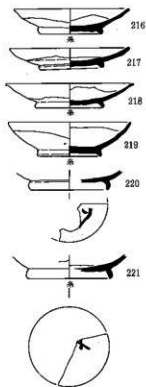
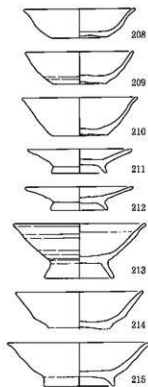


207

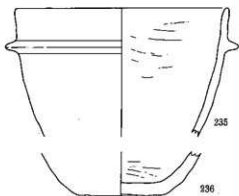
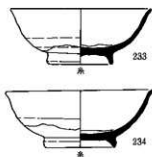
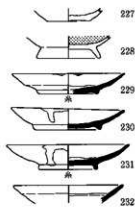
0 10cm

第41图 土器 (7)

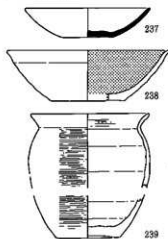
第134号住居址 (208~226)



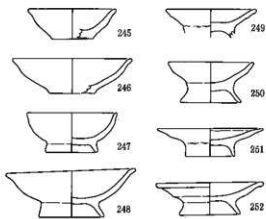
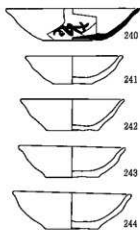
第136号住居址 (227~236)



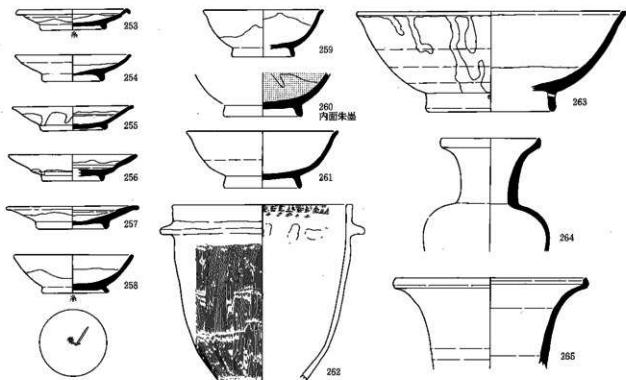
第138号住居址 (237~239)



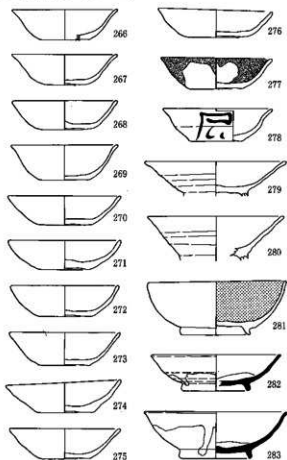
第139号住居址 (240~265)



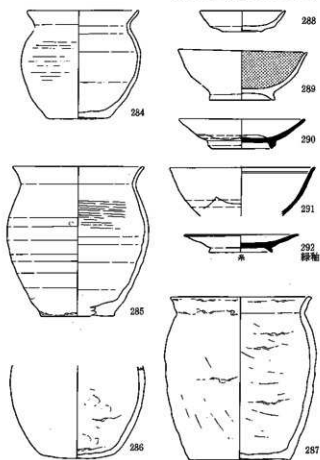
第42図 土器 (8)



第140号住居址 (266~287)



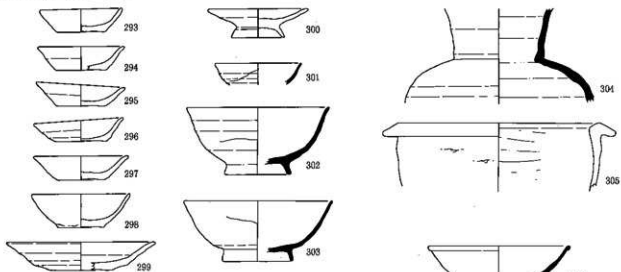
第141号住居址 (288~292)



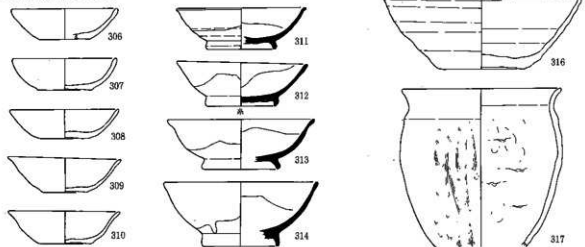
0 10cm

第43图 土器 (9)

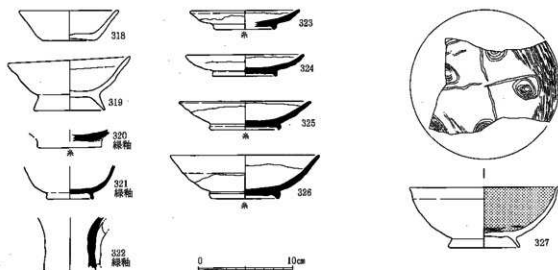
第142号住居址 (293~305)



第143号住居址 (306~317)

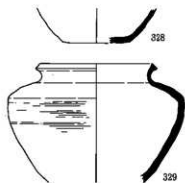


第145号住居址 (318~327)

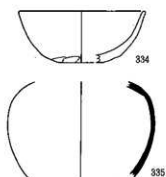
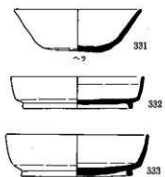


第44图 土器 00

第146号住居址 (328~329)



第149号住居址 (331~337)



第147号住居址 (330)



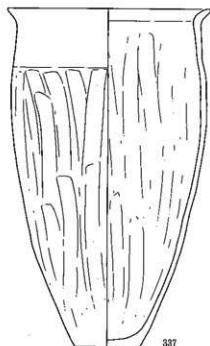
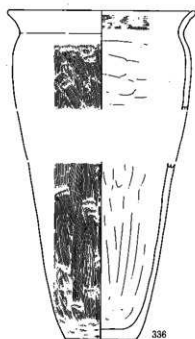
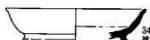
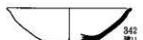
第150号住居址 (338)



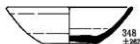
第152号住居址 (339)



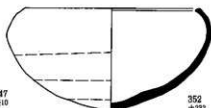
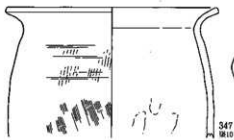
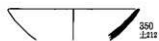
掘立柱建物址 (340~345)



土坑 (348~363)

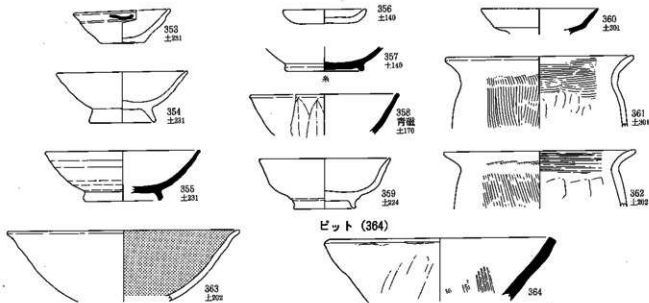


竅穴状遺構 (346~347)

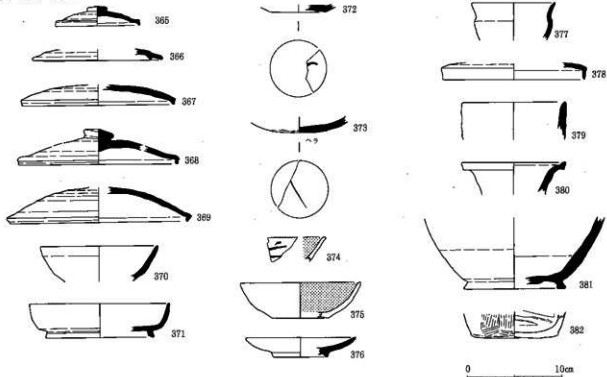


第45図 土器 (1)

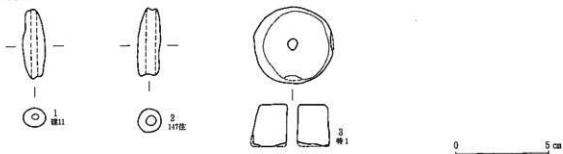
0 10cm



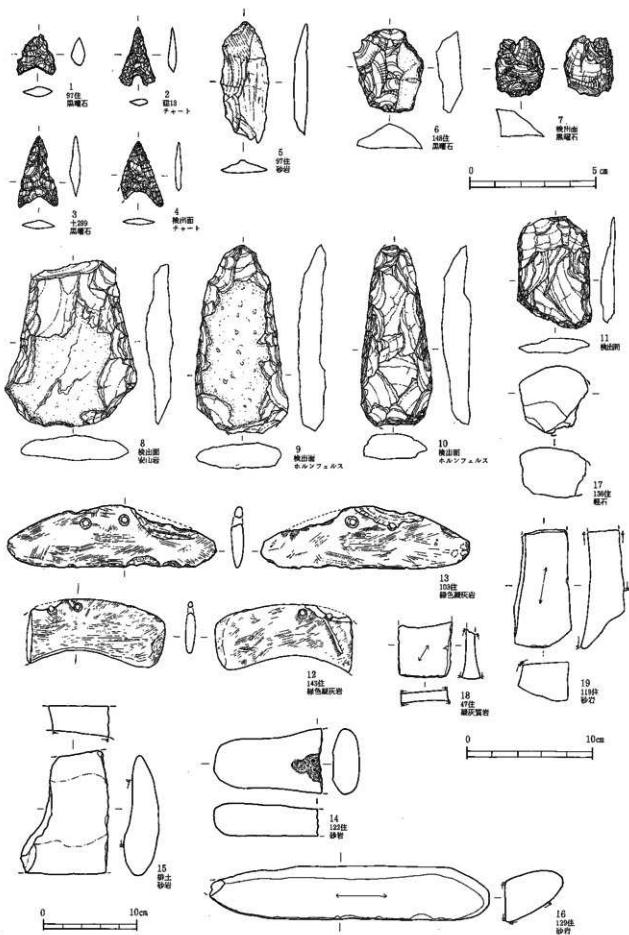
検出面 (365~382)



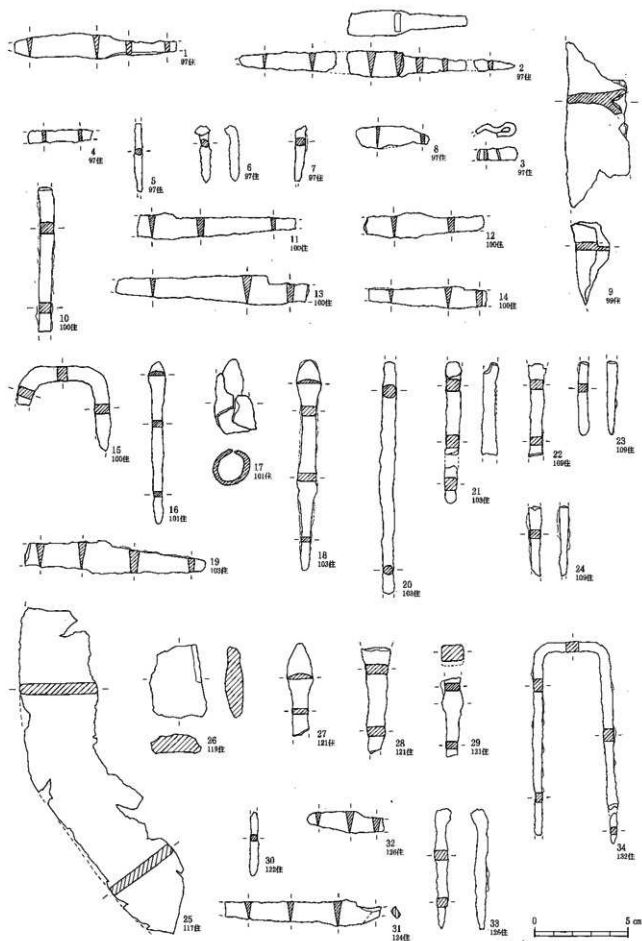
土製品



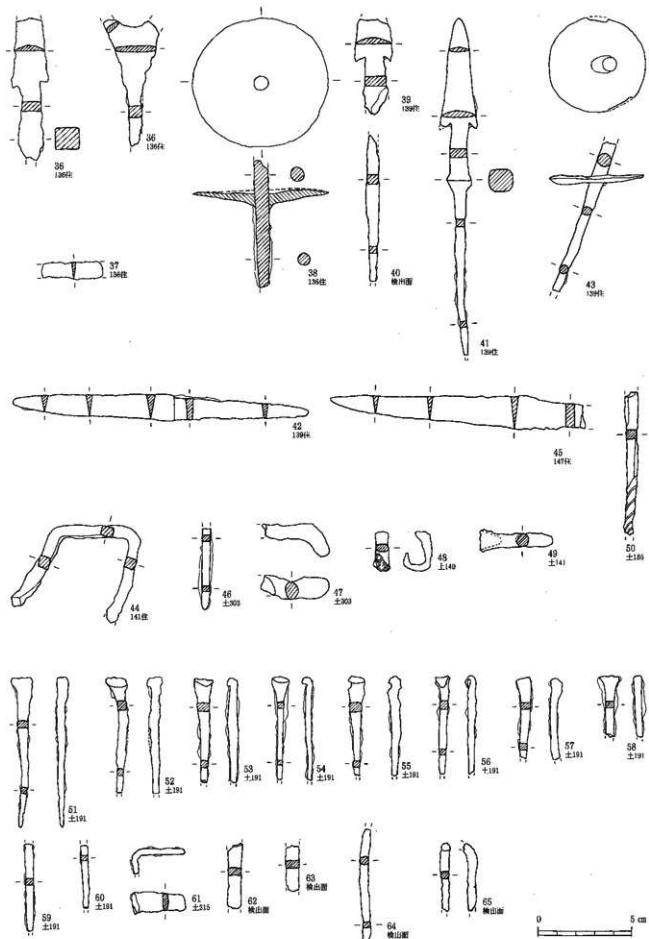
第46図 土器 (12)・土製品



第47図 石器



第48図 鉄器 (1)



第49図 鉄器 (2)

IV まとめ

今回の調査は小原遺跡における大規模な発掘調査としてはおそらく最終であり、これで県道高家線建設から周辺地域の区画整理事業まで、一連の開発事業に伴う発掘調査が終了することとなる。従って本報告はこれまで実施した1～3次調査の完結編であり、当然それにふさわしい内容とすべきものであるが、しかしながら予算や期間、担当者の力量の問題などあり、多くの課題を抱えながらもそれをなしえなかった。まとめとするにはあまりに粗略すぎるが、ここではしめくりとして、これまでの調査成果を基に古代を中心とした小原集落の変遷過程を概観し、多少なりとも完結編としての責務を果たしたいと思う。

小原遺跡は西側の奈良井川および東側の田川双方の堆積作用で形成された微高地上に立地している。この微高地は現在のJR篠ノ井線が峰の位置にあたり、次第に先細りして遺跡の北方で間もなく途切れている。

これまでの調査結果からみて、この微高地上にはじめて人々の足跡が刻まれたのは縄紋時代である。しかしこれまで遺構の検出はまったくなく、住居を構えての居住の場としてよりもむしろ狩猟・採集といった活動の場であったと考えられる。土器の欠如と広範に散布する石鏃や打製石斧、黒曜石の剥片などがそれを物語っている。縄紋時代も晩期の終末を迎えると遺跡の東隣の微高地上、高畑遺跡に居住活動が行われ、住居址こそないもののこの時期の土器棺墓が2基検出された。そして小原遺跡でも微高地北西部、すなわち2次調査15区において同時期の突帯付の壺型土器の破片2点が出土した。あるいは高畑遺跡と同様、土器棺墓が存在したが、古代に至って住居の密集地帯となったために破壊されてしまったのかもしれない。しかし大規模な居住活動が行われた形跡はみられない。

縄紋時代以後、しばらくこの地での人々の活動の痕跡は認められず、居住地として積極的に利用はされなかったようである。今次調査で平安時代の住居址(103・143住)内から2点の磨製石包丁が出土したが、これはむしろ平安人が遺跡外から持ち込んだ可能性が高い。

小原遺跡において本格的な居住活動が始まるのは8世紀に至ってからである。これ以降奈良・平安時代を通して、疎密を繰り返しながらも活発な居住活動が行われ、中世、さらには現在の小屋や村井の集落へと継続してゆくものと思われる。古代以降の集落の動きについては報告で用いた時期区分に従ってみてゆくこととしたい。

奈良時代・1～2期(8世紀前半～中葉)

古代以降の集落の開始期で、この段階の集落は微高地の東縁部、南北に長い地帯に集落が形成される。各住居址ともとりわけ規模・内容の卓越したものはなく、また分布も散在的である。ただし、カマドを有さないもの(92・112住等)や、住居の規模が著しく小さい割に立派なカマドをもつもの(146・149住等)、あるいは用途不明の特殊遺構など、異なる機能を担った建物が集合していたようである。

奈良～平安時代・4～6期(8世紀後半～9世紀前半)

集落の発展期で、居住域は微高地全面に拡大する。この段階はおおざっぱにみて性格の異なる3つの空間で集落が構成される。まず台地西縁に掘られた溝状遺構(溝1)はこの段階のものと考えられ、集落の西を画している。微高地の北東部には大型住居址(96・97住)とそれに付随すると考えられる窪穴住居址(32・116住)、倉庫と思われる大形の掘立柱建物址群(建10～12)のみで構成される空間が形成される。この空間は未調査範囲においてあるいは溝で区画されていた可能性もある。その周囲、西側から南側にかけては、「又」の字などの墨書土器や帯金具、硯、鉄錘などの特殊な遺物を保有した住居址がとりまき、特に北西部では住居址が市松状に整然と配置されている。もう一つはこれらの南側一帯で、あまり特徴的な遺物をもたない住居址が2・3棟を1単位として散在している。

こうした空間のあり方は、墨書土器や円面硯を保有し、公的な性格ももった有力者の居住空間、これを支えた識字層である上位層の居住域、さらに下位層の居住域を思わせ、有力者と上位層においては「又」の字の共有や鉄鐸を用いた祭祀などを通しての集団の結束を図っていたものとも考えられる。なお、この段階の集落には他地域からの文物の流入も活発にみられ、例えば甲斐型土器など外来系の土器にその片鱗がうかがえる。いずれにしても、この地域での開発が最高潮に達した段階と位置づけられよう。

平安時代・7～8期（9世紀後半）

集落は前段階から継続するが、時期を追って住居址はその数を減じ、後半の8期には衰退、消滅を迎える。集落の空間構造は基本的には変化がみられず、「又」などの墨書土器を保有する住居址は北部に分布が集中している。大型住居址の存在は調査範囲では確認できないが、住居址の分布からみてその空間は維持されているようである。また大形の掘立柱建物址は7期頃までは存在していたかもしれない（例えば建16等）。この空間には100・103・115住のように鍛冶炉と思われる遺構や鉄滓、多量の鉄器を保有する住居址、それを取りまいて存在する焼土面など、鍛冶に関連する遺構が集中し、有力者の管理下に領域が決められ、大規模な作業が行われていたものと考えられる。中枢空間をとりまく住居址群からは「財富加」、「祀」などの墨書土器が得られており、この時期の集落内での信仰のあり方やその拠点の存在を示している。

しかし8期にはこうした空間構造も含め集落そのものが急速に崩壊してしまう。それがこの地域での開発が終了し、集団の移動によって集落の役目を終えたためなのか、あるいは開発の行き詰まりによるものなのかは定かでないが少なくとも次の段階へと集落が引き継がれることはないようである。

平安時代・9～10期（10世紀前半～中葉）

前段階の北半部を拠点とした集落は完全に崩壊し、かわって微高地南半部に小規模・散在的に居住活動が行われる段階である。この時期の集落は南半部に散在的な居住が行われ、調査範囲より南方での様相がわからないため確実なことはいえないが、集落としての体裁はまだ整っていない。前段階の北半部を中心とした集落構造は完全に崩れており、この段階に至って新たな集団による居住活動が始まったものとみたい。集落としては規模が小さい一方で、白磁碗の保有（143住）や、集落の有力者のものとみられる土坑墓（上118）が存在し、鉄鐸が副葬されていた。こうした点からみれば次ぎでは次の段階に連なってゆく萌芽期とみることも可能であろう。また2次調査の77・79住では衰退した在地産の炊具としての甕にかわり、胎土こそ在地的なながらも形態・技法は甲斐地方のそれに相違ないものが主体的にみられ、あたかも甲斐地方からの移住者がいたかのような印象を受ける。このような点にこの段階に定着した集団の性格が映しだされているのであろう。

平安時代・11～12期（10世紀後半～11世紀前半）

前段階に成立した新たな集落が拡大する段階である。この段階の集落は南半部で拡大し、さらに調査範囲外南方へと続くものと考えられる。集落の東部には緑釉陶器や墨書土器、鉄鐸を保有したやや大きめの住居址が存在し、また139住では朱墨パレットを保有しており、官的な性格を帯びた居住者であったのかもしれない。いずれにしても、未調査範囲が多いため確定はできないが、前段階からの新たな集落形成が一応の完成をみ、東部に中枢をおいた集落構造であったものと考えて差し支えなからう。

平安時代・13～15期（11世紀中葉～12世紀）

前段階に引き続き、微高地南半部で活発な居住活動が行われる段階である。集落のあり方をみると緑釉陶器や鉄鐸を保有した住居址が東部に集中し、住居址の規模も比較的大きい。また鉄滓や坩堝など鍛冶関係の遺物の多いのもこの地域である。本段階においてもやはり集落の中心が東側におかれていたのであろう。一方、集落西部には東部ではみられなかった鉄鈴や鉄鐸を保有する住居址があり、祭祀などの役割を担った空間は西側におかれたのであろうか。この段階の後半期にはやや住居の数を減ずるが、集落そのものが衰退す

る傾向はあまりうかがえない。古代から中世への転換期の様相は未だ判然としていないが、むしろ13世紀以降へと継続してゆくように受け取られる。

中世（13世紀～14世紀）

平安時代以来の集落が継続し、広範囲に集落が展開するものと考えられる。居住域は微高地上にとどまらず、西側に拡大している。微高地上北東部では母屋と推定される建物址をはじめ、厩や納屋などの機能を有したと考えられる複数の掘立柱建物址や竪穴住居址からなる、屋敷というべき性格の居住域があり、また小規模な掘立柱建物址や竪穴建物址からなる居住域が微高地西側一帯（1次調査10～13区）に、火葬墓などの集中する墓域が南西部に形成される。さらに2700余枚からなる埋納銭も検出され、一帯が広範に開発され、活発な生産・居住活動が行われたことがうかがえる。こうした状況は奈良井川西岸の島立地区の同時期の遺跡群などと同じ傾向を認めることができよう。

このように古代における集落の展開は奈良時代から平安時代の初期にかけて最初にこの地域の開発にあたった有力者とその集団の居住があり、それが9世紀の末には急速に衰退、10世紀以降、新たな集団による居住活動の開始があったと捉えることができよう。そうした動きは中世、少なくとも13世紀代までは継続し、あるいは現在の村井や小屋集落の原形となった可能性も高い。

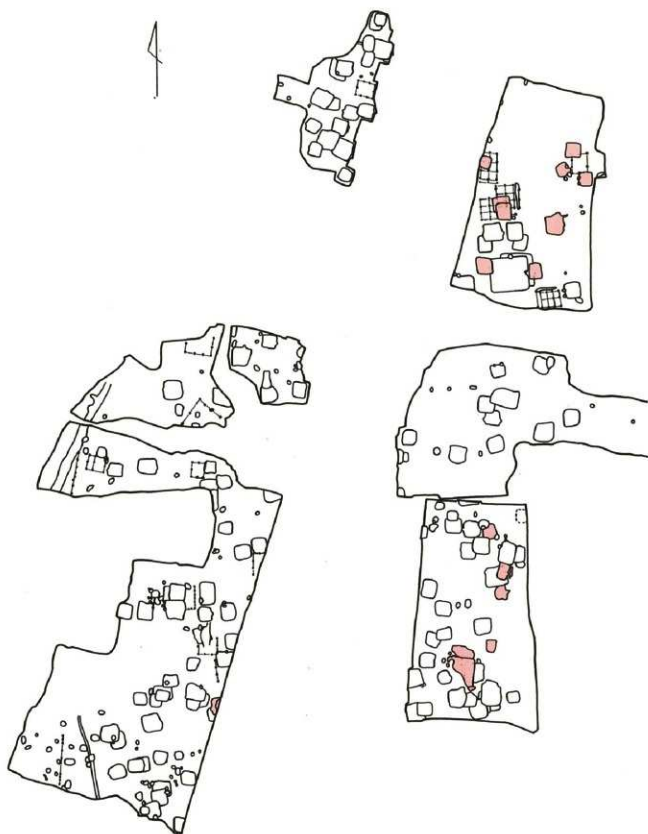
この集落の動きは小原遺跡がおかれていた筑摩郡良田郷内のほかの集落、とりわけ郷内有致の大集落である吉田川西遺跡、吉田向井遺跡、平田本郷遺跡などの集落の動きと無関係なものではなく、郷内の開発という点で互いに連関していたものと考えられる。ちなみにこれらの集落は居住活動の開始期がいずれも古墳時代末～奈良時代初期であり、少なくとも11世紀までは浮沈を繰り返しながらも継続しており、郷内の開発の拠点であったと考えられる。

集落内には平田本郷遺跡のように瓦塔や「東寺」の墨書土器、本遺跡の「卍」や吉田川西遺跡における「寺」・「卍」などが示すように、集落内に寺などの信仰の拠点があったものと考えられ、仏教をはじめとする当時の信仰の一端はほかに小原遺跡や吉田川西遺跡の「財富加」の墨書や鉄鐔の保有にうかがえ、集落内の有力者がそうした祭儀を執り行っていた可能性が鉄鐔を副葬した墓の存在等から見出される。こうした信仰的な側面のあり方からも、各集落が密接に関連しあっていたことがうかがえるのである。

さて、これらの拠点的というべき集落のなかでも中世まで集落が継続するのは吉田川西遺跡と本遺跡のみであり、この2遺跡では緑釉陶器・白磁など高級陶磁器が多出し、集落の優位性がうかがえる。とりわけ吉田川西遺跡は集落の規模、継続性、高級陶磁器の出土量など、他を抜き立てており、良田郷の核的拠点として機能したのであろう。

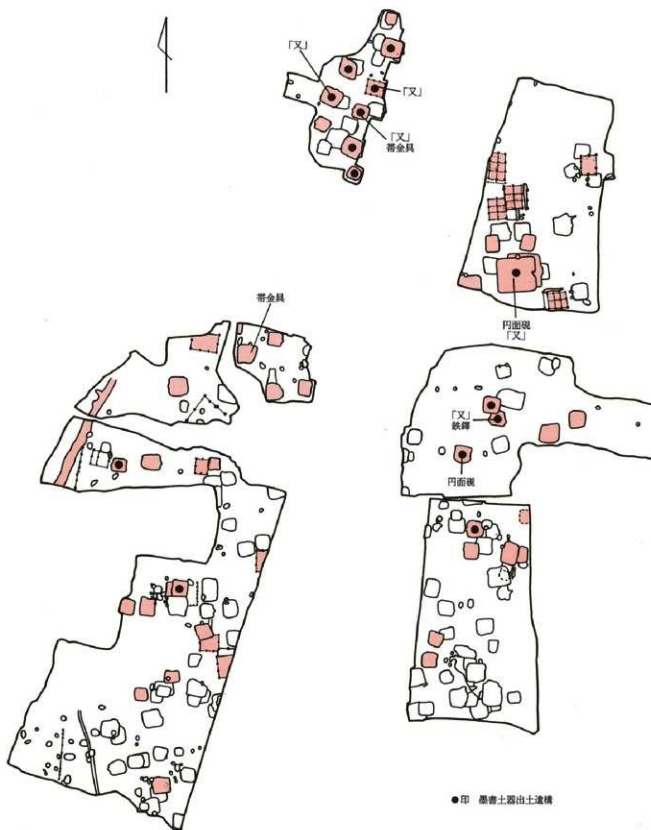
以上、3次にわたる小原遺跡の調査成果を通じて集落の動きや性格にある程度迫ってきた。なにぶん仔細な検討を加える余裕がなく、力及ばず必ずしも集落像を浮き彫りにできたとはいえないし、ましてほかの集落も含めた関係など核心に触れることはできないが、これまでの調査のまとめとして概観した次第である。それらの問題は今後の課題としておきたい。最後に調査にあたってお世話になった地元の方々や関係機関、多々専門的指導をいただいた研究者の方々に御礼を申し上げ、本書をしめくりたい。

奈良時代（2～3期）の集落



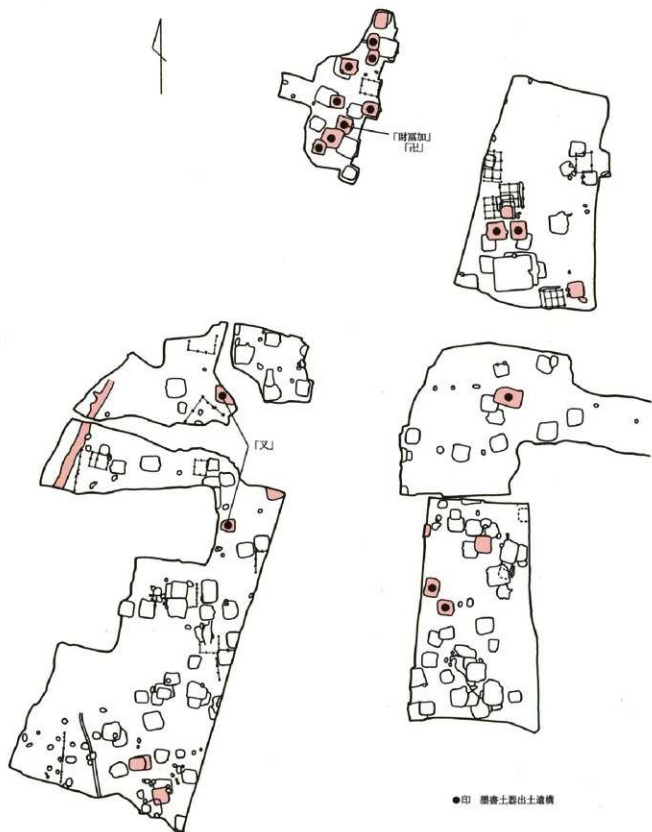
第50図 小原集落の変遷 (1)

奈良～平安時代（4～6期）の集落



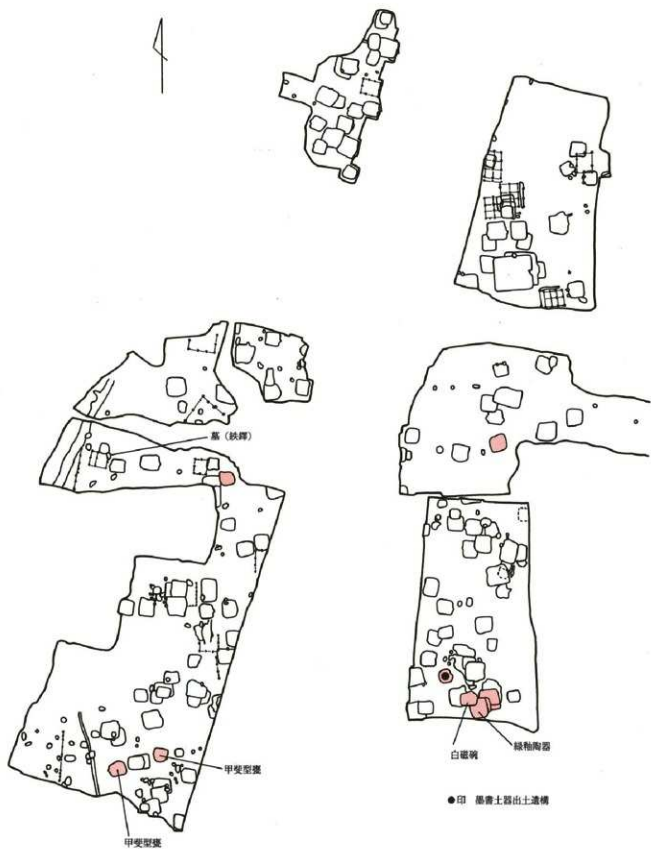
第51図 小原集落の変遷 (2)

平安時代（7～8期）の集落



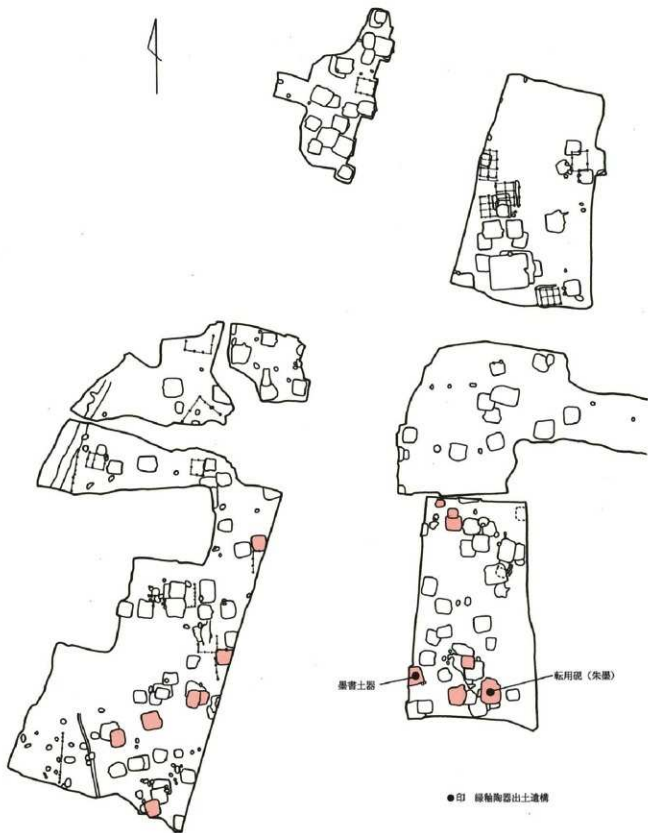
第52図 小原集落の変遷 (3)

平安時代（9～10期）の集落



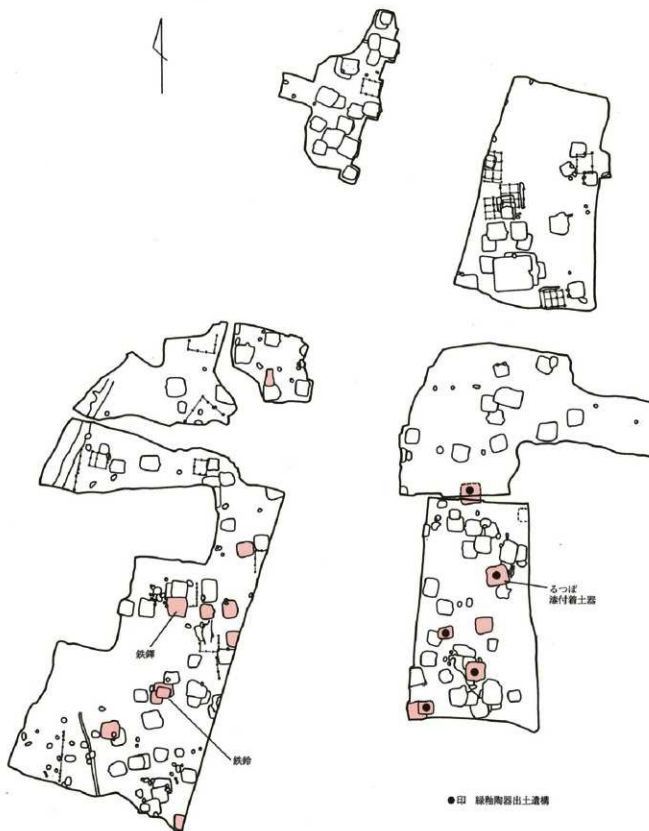
第53図 小原集落の変遷 (4)

平安時代（11～12期）の集落



第54図 小原集落の変遷 (5)

平安時代（13～15期）の集落



第55図 小原集落の変遷 (6)

图 版

16区北西部
建10~12他
(南から)



17区北東部
(西から)



17区南西部
(北東から)





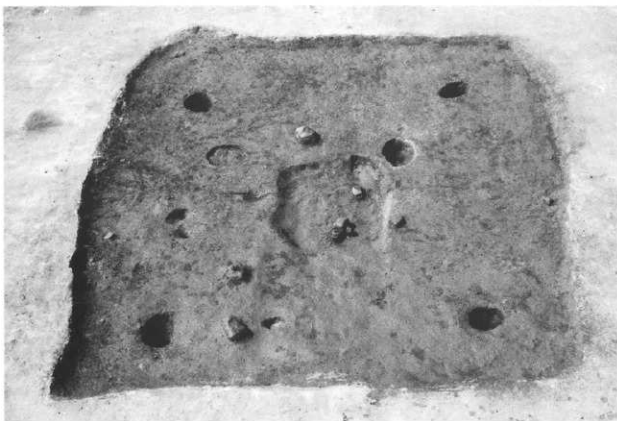
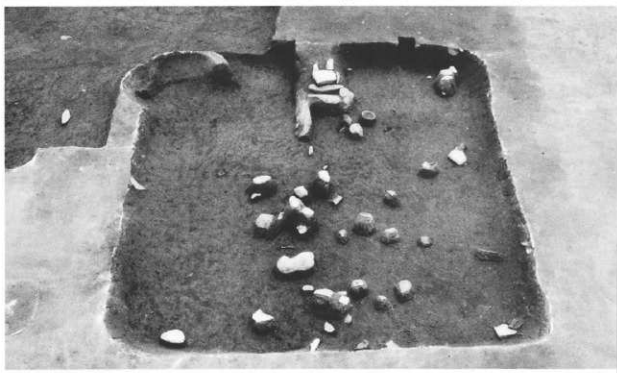
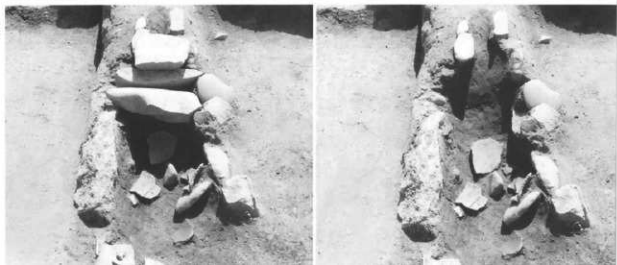
左：97住カマド
右：同 甲斐型土器
（墨書）



100住
（西から）

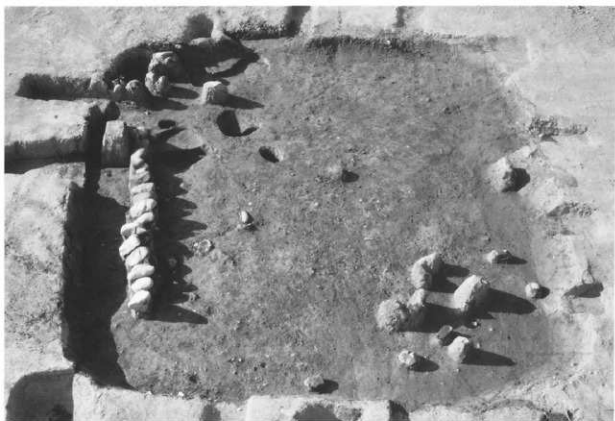


100住西壁の張出部
（鍛冶炉か）

101住
(南から)103住
(西から)103住カマド
左：天井石除去前
右：除去後



110住
(東から)



115住
(南から)



117住
(南から)

上：119住
下：120住
(西から)



122住
(南から)

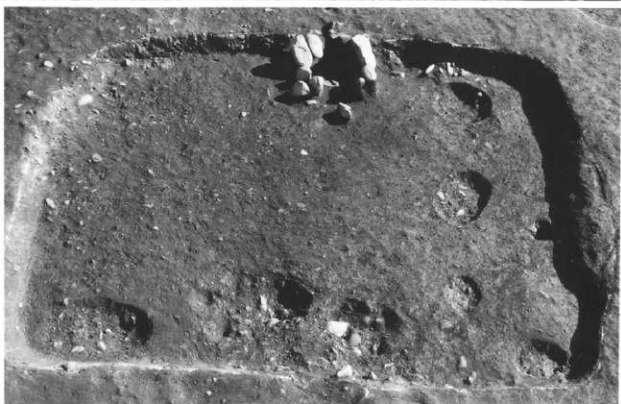


左：122住入口部
右：同 煙出し





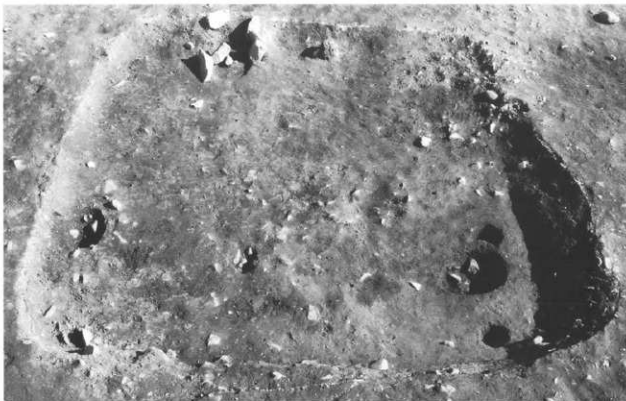
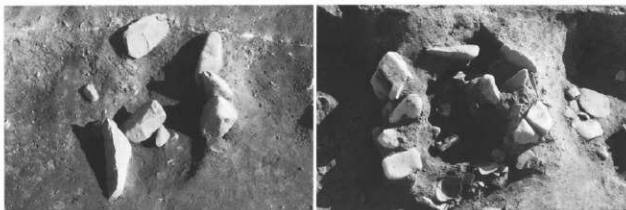
121住
(西から)



124住
(西から)



左：124住カマド
右：同 礎出土状況

128住
(西から)左: 128住カマド
右: 133住カマド133住
(西から)



134住
(西から)



左: 134住カマド
右: 同 遺物出土



136住
(西から)

奥：143住
手前：132住
(西から)



左：132住カマド脇
遺物出土状況
右：同 鉄器出土



左：132住カマド
右：143住カマド





139住
(北から)



左：139住カマド
右：同 遺物出土

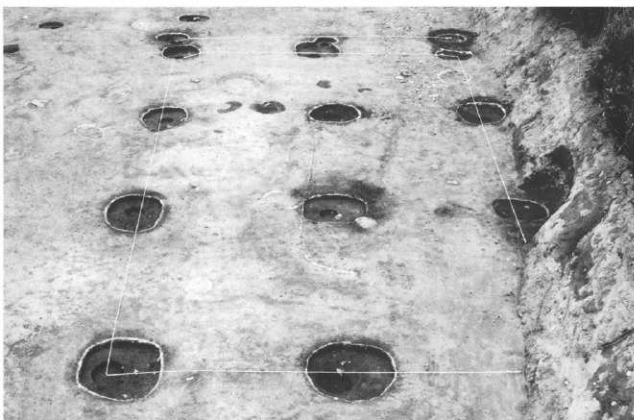


140住
(西から)

146住
(西から)149住
(西から)151住
(東から)



建10
(南から)

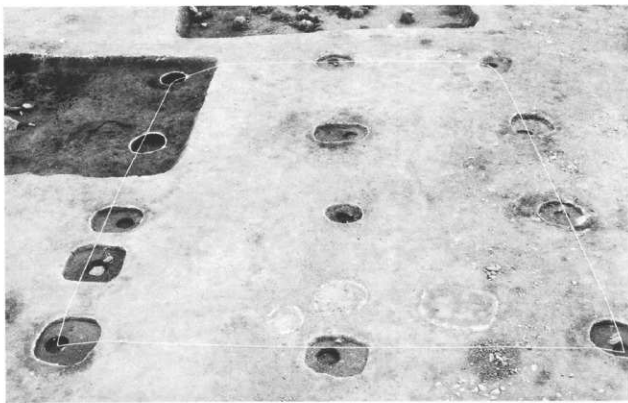


建10
(北から)



建11
(南から)

建12
(北から)



建13
(南から)



建14
(南から)





建15
(西から)



建16
(西から)

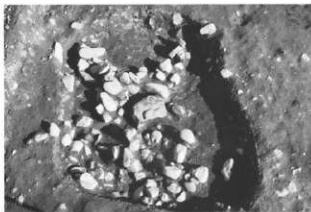


建20
(西から)

建21
土坑140・141
(東から)



左：土坑231
右：土坑232



左：土坑232
須恵器鉢出土
右：土坑247



左：土坑191
右：土坑148



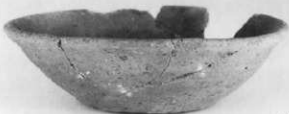
土師器杯・盤・鉢
 黒色土器杯・碗・
 須恵器杯



166



16



243



25



293



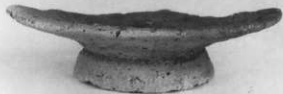
119



309



173



300



289



213



10



316



93

須恵器杯・蓋・鉢
 灰釉陶器皿・碗・
 土師器小型甕



197



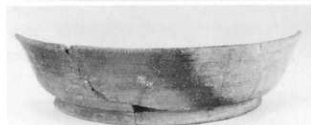
340



7



339



91



188



191



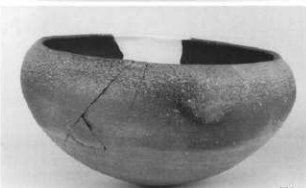
193



233



312



352



176



225



207



239



287



347



262



124



186

左：黒色土器の暗紋
右：墨書土器



327



26

墨書土器



29



左：刻書土器
右：鏡書土器



55

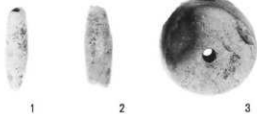


93

左：円面硯
右：紡錘車
土 鍾



22



1

2

3



42



2



45



26



9



17



34



15



44



41



18



35



36



39



27



38



43

小原遺跡緊急発掘調査報告書抄録

ふりがな	おぼらいせききんきゅうはくつちょうさほうこくしょ							
書名	小原遺跡Ⅲ緊急発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	松本市文化財調査報告							
シリーズ番号	No.123							
編著者名	竹原 学・太田守夫							
編集機関	長野県松本市教育委員会（松本市立考古博物館）							
所在地	〒390 長野県松本市丸の内3番7号（松本市中山3738-1・TEL 0263-86-4710）							
発行年月日	平成8（1996）年3月21日（平成7年度）							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
小原	長野県松本市 芳川小壺 芳川村井町	市町村	遺跡番号	36度 10分 49秒	137度 57分 47秒	19940610～ 19940825 19941107～ 19941212	3600 ㎡	村井地区両整 理事業に伴う事 前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
小原	集落跡	縄紋・弥生 奈良・平安	竪穴住居址 3棟 堀穴状遺構 3棟 掘立柱建物址 5棟 焼上面 5基 特殊遺構 2基 土坑 53基 ピット 25基 溝状遺構 1条	51棟 3棟 5棟 5基 2基 53基 25基 1条	石器（石鏃・石斧・石包丁） 土器・陶磁器（土師器・須恵 器・灰釉陶器・緑釉陶器・白 磁） 石器（砥石・浮子 他） 鉄器（刀子・鎌・鋤先・紡錘 車・釘等） 土製品（簍・紡錘車） その他（墨書土器・硯等） 土器・陶磁器（土師質土器・ 須恵質土器・青磁） 鉄器（釘等）	奈良時代～中世に わたる大集落址の 調査。 奈良時代末～平安 時代初頃の大型住 居址をはじめ各時 期の良好な住居跡 を検出。また多数 の墨書土器、緑釉 陶器などが出土し た。		
		中世	竪穴住居址 1基 堀穴状遺構 2棟 掘立柱建物址 8棟 柱穴列 4列 土坑 93基 ピット 118基 溝状遺構 2条					

松本市文化財調査報告 No.123

松本市小原遺跡Ⅲ

—緊急発掘調査報告書—

発行日 平成8年3月21日

発行者 長野県松本市教育委員会

〒390 長野県松本市丸の内3番7号

印刷 株式会社 プラルト

